

石井樋 400 年祭シンポジウム

## 「成富兵庫茂安と加藤清正」

—2人の武将は肥の国（肥前・肥後）の水をどのように治めたのか—

平成 28 年 2 月

特定非営利活動法人嘉瀬川交流軸

## 目 次

開会挨拶	2
講演 1 荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長） 「二歳違いの武将 茂安と清正の出会い」	3
講演 2 富田紘一（熊本市文化財専門相談員） 「加藤清正が肥後熊本に遺したもの」	10
講演 3 大串浩一郎（佐賀大学大学院教授） 「成富兵庫と加藤清正の治水の思想と技術」	24
講演 4 服部二朗（さが水ものがたり館） 「富国の道・利水事業—2人の武将の技比べ—」	33
講演 5 高瀬哲郎氏（石垣技術研究機構代表） 「城郭石垣技術はどのように広まったか—兵庫の師匠は清正か—」	40
パネルディスカッション	
「兵庫・清正の時代の人物群像と技術の伝承」	49
コーディネイター 荒牧軍治（さが水ものがたり館館長）	
パネリスト 富田紘一（熊本市文化財専門相談員）	
金子好雄（NPO 法人白川流域リバーネットワーク代表）	
富田紘次（鍋島報效会徵古館学芸員）	

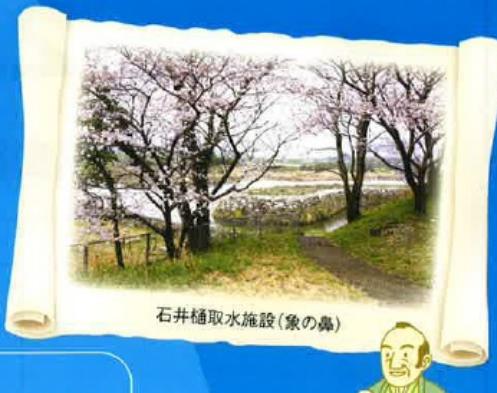
## 石井樋400年祭シンポジウム

# 成富兵庫茂安と加藤清正

二人の武将が肥の国(肥前・肥後)に遺した水遺産を探る

肥前国の水の神様・成富兵庫茂安と肥後の国を治めた加藤清正は、武将としても治水家としても互いに尊敬し、影響を受けあいながら切磋琢磨したことがうかがえます。年の差わずか2歳の同時代を生きた二人の武将が肥の国(肥前・肥後)の水をどのように治め、両国の繁栄に寄与したのかを探るシンポジウムを開催します。

※本事業は(一社)九州地方計画協会の支援を得て実施いたします



### 日 時

平成28年

27日

▶午後1時～4時30分

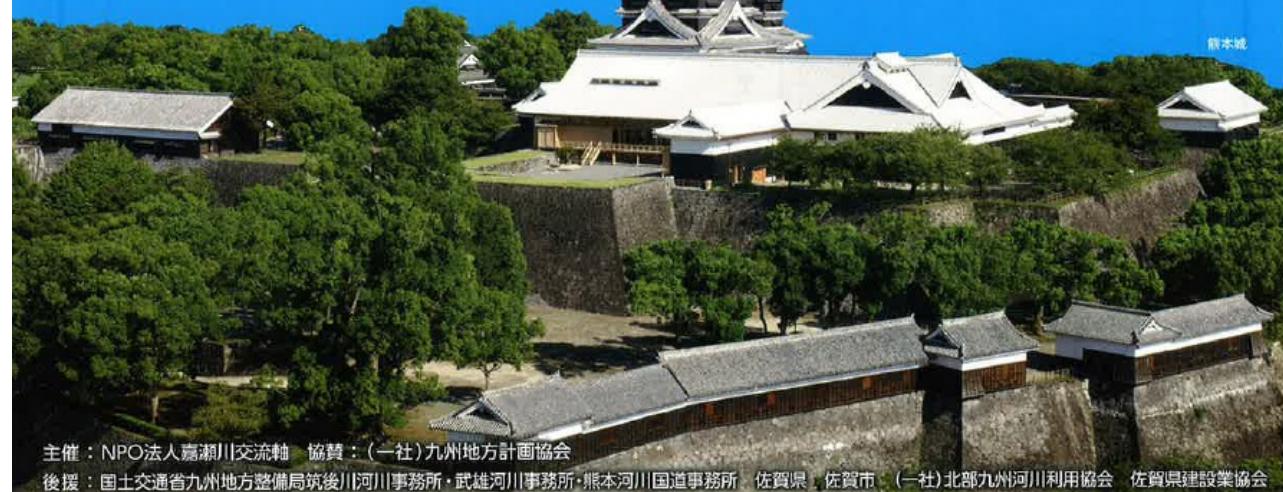
### 場 所

佐賀市文化会館  
イベントホール

入場料／無料

### Schedule

13:00	開会挨拶	
13:10	講演1 荒牧 軍治 (さが水ものがたり館館長) 「二歳違いの武将茂安と清正の出会い」	
	講演2 富田 紘一 (熊本市文化財専門相談員) 「加藤清正が肥後熊本に遺したもの」	
	講演3 大串 浩一郎 (佐賀大学大学院教授) 「成富兵庫と加藤清正の治水の思想と技術」	15:50
	(休憩)	
14:50	講演4 服部 二朗 (さが水ものがたり館) 「富国之道・利水事業 —2人の武将の技比べー」	
	講演5 高瀬 哲郎氏 (石油技術研究機構代表) 「城郭石垣技術はどのように広まったか —兵庫の御匠は清正か—」	
	(休憩)	
	16:30	パネルディスカッション 「兵庫・清正の時代の 人物群像と技術の伝承」
	●コーディネーター 荒牧 軍治 (さが水ものがたり館館長)	
	●パネリスト 富田 紘一 (熊本市文化財専門相談員) 金子 好雄 (NPO法人白川流域 リバーネットワーク代表理事) 富田 紘次 (鍋島福岡会微古館学芸員)	
	閉会	



主催：NPO法人嘉瀬川交流軸 協賛：(一社)九州地方計画協会

後援：国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所・武雄河川事務所・熊本河川国道事務所 佐賀県 佐賀市 (一社)北部九州河川利用協会 佐賀県建設業協会

**石井樋 400 年祭  
シンポジウム  
「成富兵庫茂安と加藤清正」  
—2人の武将は肥の国（肥前・肥後）の水をどのように治めたのか—**

日 時： 平成 28 年 2 月 7 日（日）午後 1 時から午後 4 時 30 分まで

場 所： 佐賀市文化会館 イベントホール

佐賀市高木瀬町日の出一丁目 21-10 Tel.0952-32-3000

開 会

開会挨拶

講演 1 荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長）

「二歳違いの武将 茂安と清正の出会い」

講演 2 富田紘一（熊本市文化財専門相談員）

「加藤清正が肥後熊本に遺したもの」

講演 3 大串浩一郎（佐賀大学大学院教授）

「成富兵庫と加藤清正の治水の思想と技術」

（休憩）

講演 4 服部二朗（さが水ものがたり館）

「富国の道・利水事業—2人の武将の技比べー」

講演 5 高瀬哲郎氏（石垣技術研究機構代表）

「城郭石垣技術はどのように広まったか—兵庫の師匠は清正か—」

（休憩）

パネルディスカッション

「兵庫・清正の時代の人物群像と技術の伝承」

コーディネイター 荒牧軍治（さが水ものがたり館館長）

パネリスト 富田紘一（熊本市文化財専門相談員）

金子好雄（NPO 法人白川流域リバーネットワーク代表）

富田紘次（鍋島報效会微古館学芸員）

## 司会進行 竹下泰彦 NPO 法人嘉瀬川交流軸理事

皆さん、今日は。何日か前までは雨とか雪とか言う予報で心配していましたが、良い天気になりました。たくさんの方においで戴き、有り難うございました。本日司会進行を努めます嘉瀬川交流軸の竹下と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

開会に先立ちまして、祝電が来ておりましたので、披露させて戴きます。



## 福岡資麿参議院議員祝電

石井樋 400 年祭シンポジウム「成富兵庫茂安と加藤清正」が盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。開会に向けてご尽力されました関係者の皆様には深甚なる敬意と感謝の意を表します。本日ご参会の皆様の今後益々のご活躍と一層のご健勝とご多幸を心より祈念申し上げます。

それでは先ず開会に当たりまして、嘉瀬川交流軸理事長であります荒牧軍治がご挨拶申し上げます。

## 開会挨拶 荒牧軍治 NPO 法人嘉瀬川交流軸理事長

皆さん今日は。石井樋に展示されている年表の中に「元和元年（1615 年）頃、石井樋と多布施川が完成した」とありますので、さが水ものがたり館では 2015 年を「石井樋 400 年」としました。このシンポジウムのテーマをどうしようかと考えていたときに、隆慶一郎の小説「死ぬことと見つけたり」の中でこのような描写があることを思い出しました。ちょっとやんちゃな主人公、斎藤杢之助が初代藩主勝茂に「この佐賀の地は誰のものですか。もしかしたら殿様のものですか」と尋ねます。勝茂は憮然として「いや、そんなことはない」と答えます。「それではここで生きている人達のものですか」と更に聞きます。勝茂が答えないで居ると、杢之助は「佐賀の地は死者のものもあるのですよね」と続けます。杢之助は毎朝「死に方」を想像している死人です。葉隠精神を体現している人物とも言えます。「死者のものもあるのです」というのは「生者が勝手に取り扱ってはならない」と言っているのです。私の一番好きな場面です。

私たちがなぜ歴史を学ぶのかというと、「私たちは確かにこの地に生きている」のですが、「この地は死者、先達が築き上げてきたもの」なので、その死者・先達の声に耳を傾ける必要があるからです。私たちは今、「この地の先達成富兵庫茂安は一体どの様なことをやって来たか」というその声を聞こうとしています。今日講演をお願いした高瀬さんと石垣のことを議論しているときに「加藤清正は成富兵庫茂安のお師匠さんなのか、弟子なのか」という問い合わせを発したのを思い出し、その加藤清正のことも勉強しようと思いこのシンポジウムを企画しました。二人は、非常に優れた武将であると同時に優れた治水家としても有名です。この肥前・肥後の二人の武将で治水家がこの地にどのようなものを遺したのか、二人の死者の声に耳を傾けてみたいと思います。これから 3 時間半、少し長丁場になりますが、おつきあい戴きたいと思います。今日は一日よろしくお願ひいたします。

## 講演 1 荒牧 軍治（さが水ものがたり館館長） 「二歳違いの武将 茂安と清正の出会い」

茂安と清正は2歳違います。茂安の方が年長です。その二人の武将がどのように出会ったかを話してみたいと思います。

11月23日に「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」というタイトルで400年祭シンポジウム第1弾をさが水ものがたり館で開催しました。その時は、「佐賀の成富兵庫茂安」を考えました。今日のシンポジウムでは、「成富兵庫茂安と加藤清正」を考えることで、日本に於ける茂安を考えてみようと思いました。



**石井樋400年祭**

**佐賀の成富兵庫茂安を考えた**

**イベント1**

**シンポジウム「成富兵庫茂安が佐賀に遺したもの」**

平成27年11月23日 さが水ものがたり館会議室

島谷幸宏（九州大学大学院教授）「歴史的河川遺産を残すことの意味を探る」  
荒牧重治（さが水ものがたり館館長）「成富兵庫茂安の人物像と治績」  
多良裕正（吉野ヶ里町長）「蛤水道から 五ヶ山ダムへ」  
市丸昭太郎（武雄市編集・歴史研究会会長）  
「六角川大堰を巡って—成富兵庫茂安と前田伸右衛門ー」  
地元の語り部が一堂に会し佐賀の成富兵庫茂安を語りつくす

**イベント2**

**シンポジウム「成富兵庫茂安と加藤清正」**

平成29年2月7日  
佐賀市文化会館イベントホール

○日本国中の一流の人物と交流していた成富兵庫  
○成富兵庫と加藤清正の治水・利水技術について語る  
○城づくりの技術の変遷(六太衆→清正→一テ・レイケ導流堤へ)

**清正との関係を通して日本における茂安を考える**

石井樋400年祭シンポジウム  
**成富兵庫茂安と加藤清正**  
二人の豪傑が歴史的河川遺産に残した足跡を再び  
見直す。その中で、茂安は清正の治水政策に影響を受けた。  
また、清正は茂安の治水技術を高く評価した。  
このシンポジウムでは、その歴史的背景と茂安の治水技術について語ります。

名だたる武将と広い交友があった兵庫

この表を見て下さい。今日の主人公の成富兵庫茂安と加藤清正を真ん中に置きました。成富家には「成富家譜」と言われる文書が遺されています。成富兵庫茂安以下、成富家の人々がどのように繋がってきたかを示した文書ですが、その中に記された記事の中から茂安が接触したことを示してある人物を並べてみました。豊臣秀吉、小早川隆景、浅野長政、石田三成、黒田如水、小西行長、立花宗茂と云った武将達との付き合い、交流が書かれています。右側に移って福嶋正則、黒田長政、藤堂高虎、加藤嘉明といった武将達の名前も出でてきます。それぞれの名前の下に示したのは、どのような内容の接触をしたか示したものです。豊臣秀吉は、文禄・慶長の役における茂安の活躍、武功を聞きたがっていて、兵庫を名護屋城に呼び寄せてその話を聞いて非常に喜んだ事が

## 成富兵庫茂安と加藤清正・藤堂高虎

### なぜ加藤清正と藤堂高虎か

- 茂安と最も親交の深い二人  
朝鮮出兵→茂安が援けた  
唐嶋の船戦・蔚山城の包囲戦
- 清正→尾張出身 高虎→近江出身
- 城造りの名人 反りの清正、高さの高虎  
茂安と一緒に日本中の城を作った
- 政権中枢との密着度  
清正→母：羽柴秀吉の母 大政所の従姉妹  
高虎→主君を7度替えた一家康の参謀格
- 非常に強い武将 身長6尺2寸(185cm)超え
- 清正と高虎は親友 個人としての共通性

戦友



藤堂高虎

穴太衆  
石垣  
城郭



藤堂高虎

3人とも法華経信者

小説「加藤清正」 海音寺潮五郎著  
武将としての加藤清正

小説「下天を謀る」 安倍龍太郎著  
藤堂高虎と加藤清正の濃密な関係を描写

**成富兵庫茂安と加藤清正・藤堂高虎**

## なぜ加藤清正と藤堂高虎か

- 茂安と最も親交の深い二人  
朝鮮出兵→茂安が援けた  
唐嶋の船戦・蔚山城の包囲戦
- 清正→尾張出身 高虎→近江出身
- 城造りの名人 反りの清正、高さの高虎  
茂安と一緒に日本中の城を作った
- 政権中枢との密着度  
清正→母：羽柴秀吉の母 大政所の従姉妹  
高虎→主君を7度替えた→家康の參謀格
- 非常に強い武将 身長6尺2寸(185cm)超え
- 清正と高虎は親友 **個人としての共通性**

**戦友**



藤堂高虎

**穴太衆 石垣  
城郭**



藤堂高虎

**3人とも法華経信者**

小説「下天を謀る」 安倍龍太郎著  
藤堂高虎と加藤清正の濃密な関係を描写

小説「加藤清正」 海音寺潮五郎著  
武将としての加藤清正

示されています。黒田如水の項には、彼が九州平定で筑後にやって来たときに、茂安がちゃんと正式の武装で出迎えたことに如水が感動し、名刀一本松を贈ったことが示されています。

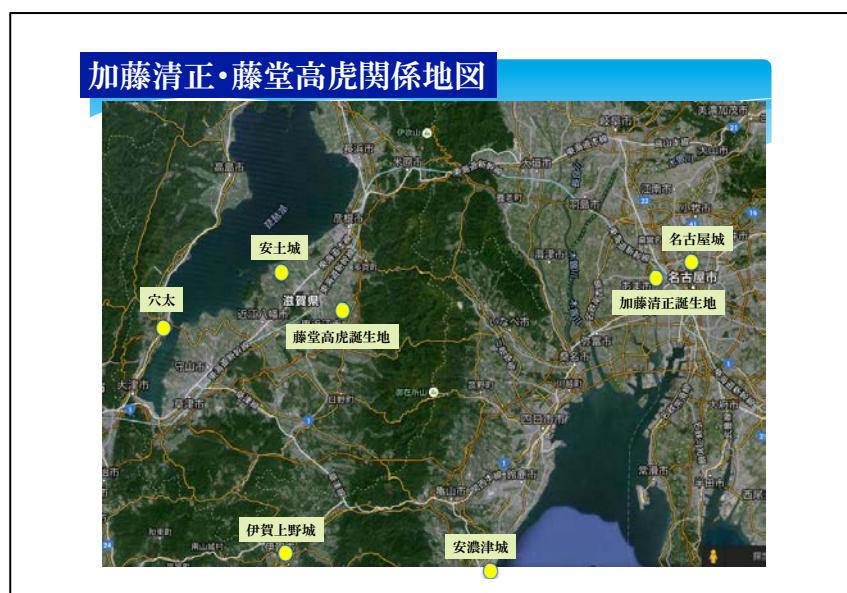
このように名だたる武将達とこのように付き合ってきた事を考えると、茂安は、単に佐賀ローカルの田舎侍ではなく、外交官としても、武将としても、治水家としても多くの人物と付き合っていたことも理解しておくべきだと思います。この視点を私に教えてくれたのは九州大学の島谷先生です。「荒牧先生、茂安は日本国中の治水家と付き合っていますよ」と言われるのですが、先生はまだ証拠を示してくれていません。その視点に立って今から勉強してみたいと思っています。

### 加藤清正と藤堂高虎

ところで加藤清正と成富兵庫茂安が極めて親密な関係にあったことはよく知られています。今から、「成富家譜」を用いてその証拠を挙げてみたいと思います。もう一人、藤堂高虎とも非常に深い関係を持っていたことが「成富家譜」に書かれています。成富兵庫茂安はローカルな治水家であるだけでなく、当時の一流の人物達と戦や治水事業を通して交流の深かった、全日本の人物であったことを示してみたいと思います。

なぜ加藤清正と藤堂高虎を選んだかというと、この二人が親友同士であり、茂安と最も親交が深かった人物として示されているからです。朝鮮の役の際、加藤清正と藤堂高虎が苦戦しているとき、成富兵庫茂安が助けに行っています。茂安が助けられた記載はなく、茂安が二人を助けた記述だけがあります。

清正は尾張の出身であり、高虎は近江の出身です。二人とも「城造りの名人」と呼ばれています。「反りの清正」「高さの高虎」と呼ばれ、城造りの名人としての共通点があります。清正の母親は秀吉の母大政所と従姉妹同士です。高虎は主君を7度も変えていますので「裏切り者」の汚名も受けますが、家康の参謀格に上り詰めた人物です。この人を主人公にした歴史小説は非常の面白く、一気に読み上げました。近江の出身で伊賀上野の城主になった人ですから、「当然忍者に関係があったに違いない」と考え、忍者と登場させたことで非常に面白い小説になっています。茂安、清正、高虎3人とも法華經の信者で、法華宗という点でも繋がっています。また、清正も高虎も6尺2寸(185cm超)の大兵であったと言われている人です。その二人の関係を非常に良く示した小説が、直木賞作家安部龍太郎の「下天を謀る」です。この二人と成富兵庫茂安との間に非常に深い交流があったことが面白いと思って、今日のテーマに選びました。



## 城づくりの名手加藤清正・藤堂高虎そして成富兵庫茂安

近世の城造りは安土城から始ましたと習いました。城郭づくりの技術者集団として「穴太衆（あのうしゅう）」というのが出でますが、その穴太はここです。加藤清正が生まれたのは名古屋城のちょっと西です。藤堂高虎が生まれたのは近江で、後に城主になる安濃津城というのはこの位置になります。二人に関係した土地がこの範囲に並んでいます。後の講演で、この周辺が近代城郭の発祥の地であることが出てくると思いますが、その二人と

茂安が非常に親密な関係があったことを示したくてこの図を作ってみました。

藤堂高虎が関わったとされる城の一覧を示しています。和歌山城、大洲城と続いて、名古屋城、江戸城の城造りに関わっています。加藤清正も熊本城、名護屋城、蔚山倭城と続いて、名古屋城の普請奉行を務めています。また、成富兵庫茂安もここに示す城造りに関わったことが成富家譜に出てきます。これから見ると、江戸城と名古屋城で3人は出会っていることになります。何らかの形で交流を深めていたことは想像できます。清正の熊本城、高虎の宇和島城は、城の好きな人達に非常に評価の高い城ですが、その二人と茂安がどのような関係にあったかをこれから見ていきたいと思います。

### 成富家譜に登場する加藤清正

この文章は、これまでよく紹介されてきたものです。天正16年（1588年）に清正是肥後半国の領主になりますが、もう半分の肥後で一揆が起こります。佐賀藩は十右衛門茂安を中心に500人を救援に向かわせます。鎮圧に成功したので清正が感状（感謝状）を出そうとしたら、茂安はそれを断ってしまいます。清正是気色ばみますが、「自分は雑兵を何人か討ち取つただけで、名のあるものを打ち取っていないので感状は貰えない」と言ったというのです。

清正是了解し、黒糸綴の鎧を茂安に贈ります。今、白石神社にレプリカが展示してあります。

### 3人の武将が出会った可能性

江戸城と名護屋城では絶対に遭っている

#### 藤堂高虎

和歌山城、大洲城、宇和島城、膳所城、伏見城、江戸城、今治城、篠山城、名古屋城（純張付）丹波亀山城、津城、伊賀上野城、粉河城、駿府城、大阪城、二条城。

#### 加藤清正

佐敷城、熊本城、名護屋城（普請奉行）、蔚山倭城、宇土城、府内城、江戸城、名古屋城（普請奉行）、麦坂（八代城）

#### 成富兵庫

佐賀城、熊本城、名護屋城（設計）、江戸市街修理、名古屋城、江戸城 大阪城（修築）

### 築城の名手 反りの清正・高さの高虎



熊本城



宇和島城

### 成富兵庫茂安と加藤清正 「成富家譜」より抜粋

#### 共通点：優れた武将

成富茂安 1560年生 1635年没

加藤清正 1562年生 1630年没

2歳年上



「成富兵庫茂安その武略と民政」より

#### 成富兵庫茂安、加藤清正を援けて鎧を貰う

同年（天正16年＝1588年）閏五月十五日。大坂於テ御城、関白殿。**加藤主頭ノ頭清正**。小西撰津ノ守行長兩人ヲ被召出、佐々陸奥ノ守跡、肥後ノ國半国宛拝領ニテ。  
(中略)土豪の反乱の経緯)

此時隣端ノ諸將軍兵ヲ引率シテ、志岐ノ浦へ来陣セラル。政家公ヨリモ**十右衛門茂安**一列五百余人ニ鑑尼九太夫ヲ被差副、彼表へ被仰付……(中略)……

其ノ上今度ノ軍功被賞**感状ヲ出サル**、然レドモ茂安其ノ書ヲ返上申ス、清正少シ氣色ニ不応風情ニテ、當時於天下此清正ガ感状ナド可キ嫌者ハ不覺ト仰也、茂安申シテ云ク、努々御感書ヲ奉嫌、今度ノ戰場ニ名アル者ヲ討取り候ハバ御感状ヲ可ク申請候ヘドモ、皆雑人原共ニテ御座候、然レバ御感書ヲ頂キ、帰国仕候ハバ**傍輩共笑物**ニ可仕申ス、其時清正氣色ヲ被直尤ノ事也ト**黒糸綴ノ鎧**を被取出、此具足ハ我等先年中国へ御伴ニテ出陣致セシ時、着申シ仕合能キ物ノ具也ト、詞ヲ被副茂安へ給ル、**是ヲ頂戴シテ帰陣セシム**。右黒糸鎧于今有之



朝鮮の役の時、清正軍は蔚山城に籠城し、非常に苦戦します。加藤清正、淺野幸長が籠もる蔚山城を明軍が十重二十重に取り囲みます。それを救援するために直茂軍をはじめとする隊が駆けつけます。その時の記述にこのようなものがあります。「御先手は茂安。次が鍋嶋平五郎。所が茂安は攻撃を開始しません。引色（退却）の気配が見えた瞬間に攻撃を開始し、一気に駆け抜け、十万の明軍を切り崩した」茂安は、非常に苦戦した清正を助けに行った、謂わば「戦友」です。

そのことを感謝したこともあるでしょう。清正は、茂安に「一万石を遣わすので、自分の家来になって欲しい」と提案します。「お戯れながら、有り難いことではあります、肥前武士のならいとして死を軽くし、聊（いささ）かも富貴利欲を顧みません。譜代の主を捨てて国を出ることは道に外れています」と断ってしまいます。鍋島直茂はその話を聞いて、1700石加えて3441石に加増します。このことからも茂安と清正が非常に緊密な関係であったことが分かります。

また、成富家譜に「清正よりは毎年年頭歳暮のため使者を給わり」とありますので、清正是毎年茂安にお歳暮を贈っているというわけです。成富家譜にはそれ以外にも、熊本城の城造りのこと、駆け落ちして熊本城に逃げ込んだ女性を引き取りに行った話、加藤家が改易になったとき「加藤家は籠城するだろうか」と尋ねられ「加藤家は籠城できない」と断言した話など4つほどのエピソードが出てきます。非常に緊密な付き合いをしていた清正との関係と言うことになります。

## 成富兵庫茂安と加藤清正 「成富家譜」より抜粋

### 成富兵庫茂安、蔚山城の清正を救う

慶長三年(1598年)正月元日、朝鮮漢南大明ノ賊兵相集テ凡百万人、**加藤清正**・**浅野幸長**・其外、太田飛驒ノ守・宍戸備前ノ守被籠タル、**蔚山ノ城ヲ十重二十重ニ取囲ム**、城中僅六千二不足、防ぎ戦ヲ行モナクテ、既ニ落城今日明日ノ内成ル故

(中略:直茂、手勢で突入することを提案し実行)  
**御先手ハ茂安**、其次ハ鍋嶋平五郎、三陣ハ御旗本也、敵陣ノ躰ヲ御覧アルニ、備ヲ動シ此方ノ陣へ打向ヒ懸リ来ルカト見エシニ依テ、十右衛門早々一戰ヲ初メ候ヘト、再三御下知アリシカ共、茂安畏ルト乍申シ、軍ヲ不初暫シ馬ノ轡ヲ鳴シ見合セ罷アリケル所ニ、賊兵懸リ来ルニテハ無之、**引色ニ見ヘケルヲ**、茂安時分ハ能ク候ゾト申シテ切掛リ、向ノ丘二十萬計ト見エタル一備ヲ悉ク切崩ス、是ヲ見テ百萬ノ賊軍、惣崩レテ引退キ、明ル三日迄引モ不切、日本勢是ヲ追打ニ打事十里ニシテ…(後略)

### 蔚山城の包囲戦 朝鮮の役最大の危機



## 成富兵庫茂安と加藤清正 「成富家譜」より抜粋

### 二君に仕えず

清正或時茂安ニ御面談ノ節仰セラレケルハ、「木ハ立所ニ依テ大木ト成り、侍ハ生所ニ依テ大身ト成ル物成、當時其方程武勇ノ侍天下ニ稀也、五畿内ヨリ東ニ生マレナバ、各別身體モヨカルベキニ、小身ニ罷在事ハ國柄也、侍ハ渡リ物ト云ゾ、肥後ヘ参レカシ、**一万石**遣ワス可シ」ト事也

茂安御答申シケルハ、「御戲レナガラ身ニ取り**有難キ**、御意忘レ難ク存ジ奉リ候、去ナガラ**肥前武士ノ習イ**、義理ヲ専トシ**死ヲ軽クシ**、聊カモ富貴利欲ヲ顧ミズ候、然レハ某ニ肥後一国ヲ下サルルトテモ、譜代ノ主ヲ捨テ國ヲ後ニ致ス儀ハ、道ニ非ザル儀ナリ」ト申ス

→ 直茂:1700石を加増 → 3441石に

### 日常的な付き合い

朝鮮御在陣ノ間、茂安軍功莫大ニルニ依テ、其名天下ニ隠レアラズ、慶長四年御帰陣ノ以後加藤清正ヲ初メ、福嶋正則・淺野長政其ノ外武功ノ諸大名ヨリ、茂安一生ノ間、折々懇意ニ被仰取分、**清正ヨリハ毎年年頭歳暮ノ為メ御祝儀使者ヲ給リ**、毎度御音物ニ預リヌ、其節ノ御状于今有之

熊本城の城造り

この他にも 肥後藩に逃げ込んだ駆け落ち者の交渉

加藤家改易時の籠城するか否かの見通し

## 成富家譜に登場する藤堂高虎

藤堂高虎は家康の軍師、参謀ですから徳川家の中で相当の権力を持っています。徳川家の重鎮である高虎とどのような関係であったかに非常に興味があったので、茂安と高虎との付き合いを調べてみました。朝鮮の役の時、高虎は水軍の総帥です。加藤嘉明や村上水軍などを束ねて朝鮮に出かけます。成富家譜には「藤

堂高虎の軍が危なくなったのを勝茂公が御覧になって、茂安を御加勢に向かわせた。茂安の加勢によって藤堂は力を得て賊船を切り払ったので、勝茂公に深く御礼を述べた」と記されています。

元和元年（1615年）の大坂夏の陣に茂安は出陣しますが、既に大坂城は落城しています。その時、高虎は知恩院に居ましたので、茂安は挨拶に出かけます。「朝鮮唐嶋の船戦の時、すこぶる難儀をした際、加勢を戴いた事を憶えています。」と述べられています。また高虎は「一生の間、茂安に対して非常に懇意にされた」と記されています。

また、成富家譜に「兵庫老衰」と題した次のような興味深い一文が遺されています。

「茂安が老衰し、勝茂の江戸出府の御供が叶わなかった。藤堂和泉守が勝茂公と御面談された際、『成富兵庫は今度お供しなかったのか』と尋ねられた。勝茂公が『兵庫は老衰しているので今回は連れてきませんでした』

と答えると、『輿（こし）か駕籠を使って連れてくれば良かった』と云われたので、飛脚を出して茂安を江戸に呼び寄せた」というのです。茂安が江戸に出てきたので、高虎は「兵庫の手を取って面談をし、『お互い達者で何より』と言い合って、食事をした」と書かれています。

ですがこの文章はちょっと変です。茂安さんは1635年に亡くなっています。一方、高虎さんは1630年に亡くなっているのです。茂安が老衰しているのであれば、高虎はもっと老衰しているはずです。こ

## 成富兵庫茂安と藤堂高虎 「成富家譜」より抜粋

成富茂安 1560年生 1635年没  
藤堂高虎 1546年生 1630年没



### 茂安、高虎を援ける 高虎は水軍の総帥

此時藤堂高虎ノ軍、就中危キヲ勝茂公御覧アツテ、茂安ヲ御加勢ニ被遣、十右衛門則一列ヲ以テ、唐島へ漕付、高虎ノ軍ヲ援テ相戦フニ、  
茂安ガ加勢ニ藤堂力ヲ被得、賊船ヲ切扒ヒ帰陣有テ、勝茂公ヘ深ク御礼アリ

### 元和元年大坂御出陣

翌元和元年ノ夏、重テ大坂御出陣也、此時茂安早速御先被仰付罷登り、五月七日昼ハツ過致着ノ處ニ早大坂城落城ニテ、天守其ノ外焼失ノ時分也、二三日過テ茂安上洛、藤堂高虎知恩院へ御宿陣アリニ罷出ケル事.....  
朝鮮唐嶋の船軍ニ頗ル難儀シケルヲ、其方船ヲ押着加勢セラレシニ依テ、其場無ク、却テ番船等ヲ切取リ申事、偏ニ其方ノ援故ト、于今失念セザル由、真実ノ御会釈也、惣ジテ高虎一生ノ間、茂安ニ対、深々懇意ニ被召シ也

夏の陣に間に合わなかった茂安 → 高虎を訪問し旧交を温める

## 成富兵庫茂安と藤堂高虎 「成富家譜」より抜粋

### 茂安老衰 藤堂和泉守

茂安老衰シテ後遠所ノ御供難叶ニ依テ、御本丸御城代被仰付、江戸御供不仕、勝茂公御參府ノ上藤堂和泉ノ守殿御見舞ニテ勝茂公ヘ御面談ノ節、成富兵庫ハ今度御供不到ヤト御尋也、公御答ニハ、兵庫儀最早極老仕候故國元ヘ召置候由、御会釈和泉守殿重テ被仰ケルハ、綴致極老候共、置物ニ駕籠ニテモ、不被召連候テ不叶仁ニ御座候ト御申シ故、早速飛脚被差立、右ノ段被仰越茂安罷登候、其後和泉守殿御出ノ節、御式台ヘ罷出居候ニ諸々兵庫ト被仰手ヲ御取リ遙ニ致面談候、兼々床敷存候殊ノ他年モ罷ヨリ候、乍去達者ニ罷在リ、日出度キ事成リト想ニ被仰、其後彼ノ御座敷へ召寄ラレ、御料理出被下物等有之

高虎「茂安はなぜ来ない→駕籠でもこれる」 勝茂→呼び寄せ

高虎・茂安面談「達者なことは目出度い」

茂安:1635年没 → どんなに遅くとも茂安68歳くらいの話

高虎:1630年没 → それにしては茂安が少し老け過ぎの感じ

(茂安より14歳以上) 安部龍太郎

藤堂高虎 家康の参謀(外様大名なのに) 俱に「下天を謀る」戦友

「成富家譜」の作者は幕府の重鎮高虎との関係を強調したかった?

この「老衰」はなんだか言い訳ではないかなと思います。ちょっと茂安が老けすぎている気がしますので、「老衰」のタイトルが間違っているのではないかと思います。

藤堂高虎は外様大名でありながら家康の参謀格として相当の権力を有していた人ですから、成富家譜の作者は、高虎と非常に近い関係にあることを強調したかったのかもしれません。鍋島家は関ヶ原の合戦の時に間違えて西軍についてしまいます。家康に許しを請うときに鍋島家は様々な工作を行ったはずですから、成富兵庫茂安のこれまでの交友関係を使ったかもしれません。そんな想像をしても間違っていないかなと思います。

### 著名な治水家と成富兵庫茂安

この図は、ミツカンが出版している「水の文化」32号の「治水家の統(すべ)」の中に示されている、近世における「主立った治水家」を示したものです。この赤枠で囲んだ人達はほぼ成富兵庫茂安と同世代の人です。武田信玄に会ったと言うことは絶対にないとは思いますが、他の人はどこかで出会っている可能性の高い人達です。こういう人達とどのような技術的な交流を行ったのか、

主立った治水家  
(古代～近世)

ミツカン  
「水の文化」32号  
「治水家の統(すべ)」

行基(668-749)  
空海(774-835)

武田信玄(1521-1573)  
佐々成政(1536-1588)  
豊臣秀吉(1536-1598)  
伊奈忠次(1550-1610)  
角倉了以(1554-1614)  
成富兵庫茂安(1560-1634)  
加藤清正(1562-1611)  
川村孫兵衛重吉(1575-1648)  
西嶋八兵衛(1596-1680)  
野中兼山(1615-1663)  
河村瑞軒(1617-1699)  
板屋兵四郎(出生・没年不詳)  
大槻七兵衛(1621-1689)

茂安は多くの治水家と直接会った可能性が高い

どのように影響し合ったかが今後の研究課題

あるいは行わなかったのかと云ったことが、今後の研究課題ではないかと思っています。

茂安は、多くの治水家と直接会った可能性が高くて、私たちが学校で習った、利根川を付け替えたことで有名な伊奈忠次に会った可能性だって考えられます。なんせ、茂安さんは江戸城改築、江戸のまちづくりに参加しましたので、その時に伊奈忠次に会ったのではないかと想像力を働かせたりしています。

この赤枠で囲んだ人たちは、一度は聞いたことがある人たちだと思います。私が知らなかつた治水家の一人が西嶋八兵衛という人で、藤堂高虎に見いだされて弟子になった人です。1596年に生まれて1680年に亡くなっていますので、茂安が亡くなった頃が40歳くらいです。茂安が高虎とあれほど濃密な付き合いをしていましたことを考えれば、西嶋八兵衛とも相当深く付き合っていたのではないかと考えられます。

この西嶋八兵衛という方は、遠江国（静岡県）に生まれて、伊勢の藤堂高虎に仕えました。四国の生駒藩に請われて、当時破壊したままになっていた満濃池を3年間で再整備しました。私は空海がつくった満濃池はずっと使われていたと思っていたましたが、当時使えなくなっていたのを江戸期になって修復され、それを行った西嶋八兵衛は「讃岐の禹王」と呼ばれているというのです。

今回のシンポジウムは「成富兵庫茂安と加藤清正」に絞りましたが、茂安が藤堂高虎の弟子である西

嶋八兵衛とどのような付き合いをして  
いたのか、我々が関東派と呼んでいる  
伊奈忠次とどのような接触があったの  
かを考えて見たいと思います。

成富兵庫茂安さんを「佐賀ローカル  
の水の神様」から解き放って、日本国  
での成富兵庫茂安を考えたいと思っ  
ています。これから 3 時間ちょっと、成  
富兵庫茂安と加藤清正がどのように交  
流し、影響しあったのかをとおして、成富兵庫茂安の世界を広げていっていただければ幸いです。

どうも有難うございました。

### 西嶋八兵衛 伊勢藤堂藩家臣(高虎に見いだされた)

1596年(慶長元年)～1680年(延宝8年) 高虎が讃岐に派遣

遠江国(静岡県)浜松に生まれる。伊勢の藤堂高虎に仕えた。  
関ヶ原の戦い後、讃岐(香川県)の生駒藩に乞われ、客臣として  
生駒藩普請奉行となつた。当時満濃池は破れ、四半世紀にわたり  
放置されていた。それを3 年で再整備。さらに新田開発や湿地改良を行ない「讃岐の禹王(うおう)」と称えられた



#### 今回のシンポジウム

成富兵庫茂安と加藤清正

#### 今後の研究課題

1. 成富兵庫茂安と西嶋八兵衛(高虎の弟子)
2. 成富兵庫茂安と伊奈忠次(関東流)

## 講演2 富田紘一（熊本市文化財専門相談員）

### 「加藤清正が肥後熊本に遺したもの」

熊本からお呼びいただいた富田と申します。私はもともと考古学が専門で、縄文時代の土偶の研究をやってきました。ご存知の通り、今熊本城にたくさん的人がやってきて、いろいろな説明を受けます。あの有名な熊本城なのにまだ分からぬことがいっぱいあるのです。考古学的な手法で熊本城の研究を始め、熊本城の周りを流れている河川の話になってきました。私は部分的にしか河川のことはやっていませんから、今日私がここに立っているのは、異種格闘技戦で土俵から四角いリングに上がったような気持ちです。加藤清正が熊本でどのようなことをやったと言われている伝承と、本当に加藤清正がやったという確証のあるものとを紹介したいと思います。

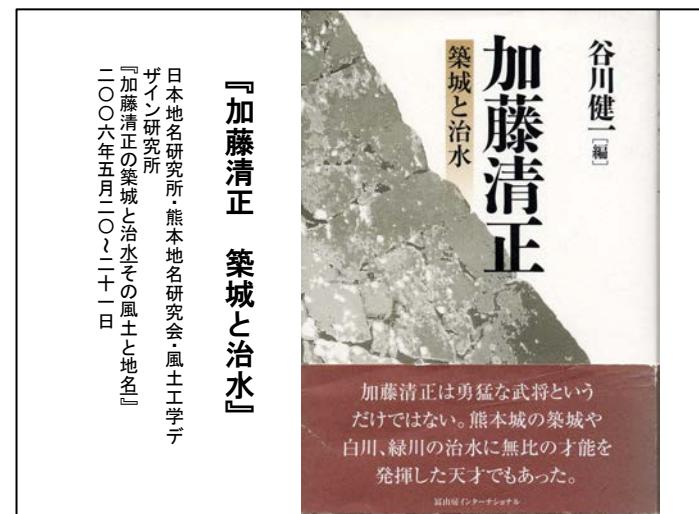


### 竹林征三先生

熊本築城400年（2007）のイベントをやったときに、地名研究会が中心になってシンポジウムを開きました。谷川健一先生等も参加戴いて立派な本ができました。今日はこの本に基づいて話させてもらいますが、その時山梨にある風土工学研究所の竹林先生が講演をなさいました。この右側のページが講演されているときの様子です。丸顔でそこそこのお爺ちゃん先生だったので、その方が土木の系譜を話されて、その中に成富兵庫茂も加藤清正も登場しました。

### 武田信玄

そのお話を先ず、日本の土木のルーツは弘法大師に始まりますが、今日のテーマの近世になりますと武田信玄の富士川の支流の開発から始まります。よく知られていますが釜無川の支流、御勅使（みだい）川を付け替えていました。元々御勅使川は甲府盆地に注いでいましたが、堤防をいくら築いても御勅使川の山から流れてくる水量で堤防が決壊して甲府



盆地が水浸しになります。この堤防を守るために御勅使川を付け替えて岩にぶつけて、水の勢いを削いだ後で甲府盆地に流れるようにする工事をやられました。実際現場に行ってみると、御勅使川の各所に、現在も治水面で生きているかどうか分かりませんが、模型が展示されています。

**武田信玄**

大永元年（1521）11月3日生  
元亀4年（1573）4月12日没



**武田信玄 御勅使川の付け替え**



### 佐々成政

この武田信玄から越中富山の城主でありました佐々成政に技術が伝わって、成政は富山の常願寺川の治水を行っています。佐々塘とか殿様林というものが今も残っているらしいのですが、成政は九州平定が終わった後の肥後の一国領主としてやって来ます。所が、肥後は、国侍が50数家以上居るのですが、結構頑固者（もっこす）が多いのです。佐々成政が殿様としてやって来ますが、扱いが難しくて、入国から1ヶ月で一揆が起こります。結局は、尼崎に追われて切腹させられます。

まいります。成政は武将としても有名で、常に秀吉の敵対大名として戦った人です。

### 加藤清正

佐々成政が肥後に急にやって来て、土木工事をやる間もなく家は潰れてしまうのですが、その後で肥後半国の藩主になったのが加藤清正です。この人も成富兵庫茂安と並ぶ九州の土木の神様と呼ばれる人です。なぜ佐々成政から加藤清正に技術が伝わったかというと、加藤家は5000石くらいの豊臣秀吉の若頭くらいであったものが、19

**佐々成政**

富山 常願寺川の治水

天文5年（1536）1月15日  
天正16年（1588）閏5月4日没



**加藤清正**

永禄5年6月24日  
尾張中村に生れ  
慶長16年6月24日没



万5千石の近世大名として肥後に入ります。所帯が大きくなつたものですから、家来を増やす必要があります。一方佐々家の家臣は、殿様が突然切腹させられて家が潰れリストラに遭つたみたいなですから、清正はそれを抱え込みました。竹林先生の説ですと、佐々成政の下で土木を担当したのが大木兼能（かねよし）と云う人で、こういう技術者を通じて加藤清正に技術が伝わったのだろうと言われております。

その加藤清正から成富兵庫茂安に技術が伝わったと竹林先生は仰有っていますが、「それは逆じやないか」と佐賀の人は言われる。先ほど話がありましたように確かに成富兵庫が加藤清正より2歳年上です。その辺は「仲良しだった」と言うことにしておきたいと思います。九州の治水の系譜は成富さんにやって来ます。ここで顔写真を見せたかったのですが、どうも肖像画が無いらしいので、成富さんが使っていたという具足の顔のところで代用しました。

### 加藤清正と成富兵庫

加藤清正と成富さんの関係を示す資料があります。鍋島歴古館に所蔵されている古文書で、加藤清正から成富兵庫に出した手紙で、「歳暮のお祝いに小袖を一反プレゼントします。今度会った時にまたお話をしましょう」という内容です。これを見せてもらって感じました。先ほどのお話でとこの頃の成富さんは家来としては高額の3千何百石をもらっていますが、肥後52万石の殿様が、自分で持っていたわけではないでしょうが、他所の藩の一武将に歳暮を贈って、「今度お会いしたときに懇ろにお話をしましょう」なんて言っています。どういう関係にあるのだろうかと思いました。先ほどのお話にあったように、朝鮮半島に於ける蔚山城の籠城で助けてもらったりしたことがあったからでしょうか、結構敬意を表しています。これは熊本では余り知られていない文書ですが、「若干面白くないな」という気がしないでもないのですが、それ位身分の差を超えて、藩の差を超えて付き合ったの

**大木兼能** 天文21年(1552)生  
慶長16年(1611)没60歳



**成富兵庫茂安** 永禄3年(1560)生  
寛永11年(1634)没60歳



成富兵庫茂安所用具足 公益財団法人鍋島報效会所蔵

**加藤清正書状 成富兵庫宛 鍋島報效会史料**

成富十 右衛門尉殿 〔 清正(花押)	士 月 十 日 加 肥 後 守 〔 恐々謹言	小袖 壹 反 進 之 候 誠 雖 少 之 至 候 為 歲 暮 之 祝 儀
		幾 久 可 申 承 驗 給 斗 候 猶 來 春 以 面 謁 可 申 述 候

が加藤清正だったのではないかと考えています。これは先ほどとダブりますが、それぞれが活躍した時代です。

### 加藤清正と熊本

今日は「加藤清正と熊本」という題でお話をしたいと思います。これからお話ししますのは、ここに示しますように『肥後讀史総覽』という文献にまとめられた中で、熊本の土木工事を何時、誰が、どれくらいの面積に及んだかを示した表です。この中で、加藤清正がやったと言わわれているのが赤字で示した部分です。半分くらいの事業を加藤清正がやったことになっています。これを本当に彼がやったものかどうか。成富兵庫の場合も同じでしょうが「これは成富さんがやった仕事だ」と云われているものが多くあると思います。加藤清正の場合も、清正の仕事だと言わわれているものを赤字で示しましたが、本当にそれだけやったのか、それとも「このような難工事は加藤清正でないとできない、成富兵庫茂安でないとできない」と考えられるから付加されたのかも知れません。佐賀の場合も熊本の場合も、「この堤防を作るから、人夫を何人出しなさい」と言った具体的な事業を示す資料はないだろうと思います。先ほども話していたのですが、以外と土木工事の資料は遺されていないのですね。

## 肥後における土木治水 『肥後讀史総覽』所収

名 称	築造年代	位 置	築 造 者	灌漑面積
平野井手	文化6年(1809)	玉名郡三加和村神尾	庄屋 北原 松右衛門	
寺田井隨	慶長年間(1596~1614)	玉名市寺田	加藤清正	二一〇町
" 用水改修	宝暦14年(1764)	" "	惣庄屋 小田次左衛門	"
" 改修	文政12年(1829)	" "	三村 章太郎	"
川崎樋門	文化年間(1804~1817)	川崎	庄屋大野十左衛門	一〇一三町
"	天保年間(1830~1843)	" "	惣庄屋 三村 章太郎	"
白石 壇	慶長年間(1596~1614)	白石	加藤 清 正	一八五町
"	文政3年(1820)	" "	惣庄屋 小森田七右卫門	"
秋丸井樋改修	嘉永4年(1851)	秋丸	関 忠之丞 創設者不明	一六〇町
御宇田井手		鹿本郡鹿本町津袋	御宇田城主	一八五町
小坂井手	文政元年(1818)	鹿北町広見	庄屋 北原 万作	五〇町
津留井手	文化5年(1808)	山鹿市三岳	惣庄屋金栗 濑助	七六町
寺島井手	天正年間(1588~1591)	寺島	加藤 清 正	一五〇町
西牧樋井井手	文化8年(1811)	川辺	西牧村庄屋 林助	五六町
			椿井庄村屋 清七	
庄 塚		鹿本郡菊鹿町長谷	加藤 清 正	二五〇町
原井手	元禄14年(1701)	菊池市水源	惣庄屋 河原塗左衛門	二八〇町
兵藤井手	天保4年(1833)	" "	庄屋 平山八左衛門	
古川井手の水勢増強のため				
古川井手	文化13年(1816)	" 迫間	庄屋 五島 嘉兵衛	二六〇町
西迫間井手	元禄16年(1703)	" "	惣庄屋 河原塗左衛門	一九町
今村井手	宝永2年(1705)	菊池市河原	" " 別名宝永トンネル	九二町
築地井手	慶長10年(1605)	" 隅府	加藤 清 正	五〇〇町
横田井手	慶長年間(1596-14)	" "	" 別名神来井手	四〇町
仮屋井手	" ( " )	" "	" 末は横田井手に合流	
赤星井手	" ( " )	戸崎	"	三〇町
橋田井手	寛政11年(1799)	菊池郡七城村橋田	中富・川崎・上中富村庄屋	六〇六町
" 水路延長	文化11年(1814)		"	
菰入新田井手	弘化3年(1846)	" 岩瀬	坂井・菰入村協議	
小野田井手	慶長年間(1596-14)	阿蘇郡一宮町中通	加藤 清 正	二八〇町
琵琶首井手	寛保3年(1743)	" 久木野村久石	南郷水定役 片山伊左衛門	一一八町
保木下井手	元禄2年(1689)	" "	片山嘉左衛門	一二六町
立野井手	万治元年(1658)	菊池郡大津町立野	家老 長岡 監物	五二町
瀬田上井手	元和4年(1618)	" 濑田	加藤 忠 広	四七〇町

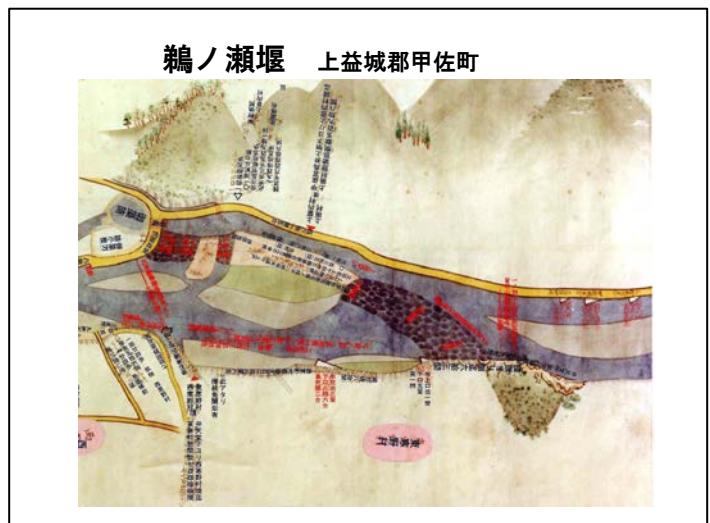
## 加藤清正の仕事

これからは、熊本で清正がやったと言われている仕事をちょっとご紹介したいと思います。最近分かったことで、清正の時代にやったことが確実に確認できたこともご紹介してみたいと思います。私のファイルに入っている写真から選んだのですが、まずは熊本平野の真ん中を流れている緑川における工事を紹介しまして、その後、阿蘇から流れてくる白川の用水路、鼻繰り井手を紹介したいと思います。両方とも清正伝説がついているところです。

### 鵜ノ瀬堰

これは、緑川上流の鵜ノ瀬堰で、2005年に国土交通省から頼まれた発掘調査が行われました。ここは緑川が山から平野に打ち出すところで、ここに鵜ノ瀬堰と呼ばれる堰が作ってあります。なぜ鵜ノ瀬と言われるかというと、非常に流れの速い場所で、堰堤を作ろうとしても、どこに作りようもないと思っていたところ、流れの緩やかなところに鵜が並んで留まっていたのです。鵜が留まっているその流れの緩やかなところを繋いでいたら大水が出ても持ち

こたえる堰堤ができたというのです。このスライドは、発掘の見学会の時の様子ですが、これで見ると縦長の石を上下向きにして堰堤を築いている気がします。結構大きな石を敷き並べているんですね。私も好奇心旺盛なものですから、大水が出たらどうなるだろうかと思っていましたら、次の年 2006 年の梅雨の時期に大水があったので見に行ってみました。水位が高いときは水害に巻き込まれると大変ですから、ちょっと水かさが退いてから出かけました。内藤先生の見立てによると、50cm くらい水が退いた後にどうも私は行ったらしいのです。その時に写した写真で、ここが堰堤のある場所で、この部分がえらく波立って流れているのです。これは、その後 2008 年に同じ場所に行く用事があった時に写した写真です。ここは、見学会の時もコンクリートがあったところですが、ここは石が敷き詰められていたところだったのですが、そこがコンクリートで固めてあるのです。恐らく発掘で石をほじって、回りの土を取ってしまったものでしょう。おそらく大水の時にこの白波が立っているところで、下の石をえぐってしまったのではないかと思います。迂闊に手を出すと遺構が壊れてしまう良い例だと思います。



鵜ノ瀬堰 左岸上流部



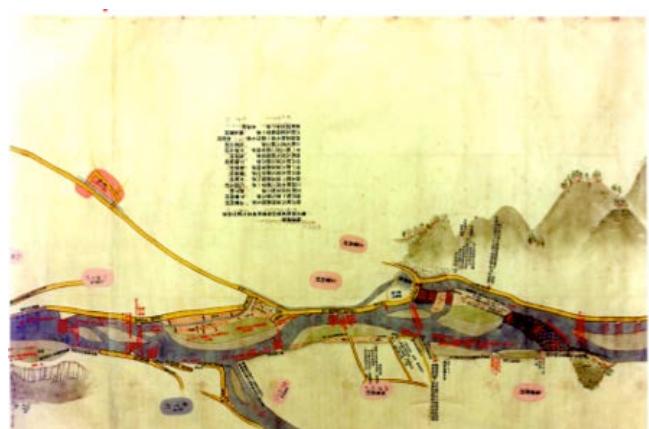
鵜ノ瀬堰 大水 2006.7.22.



鵜ノ瀬堰 大水 2006.7.22.



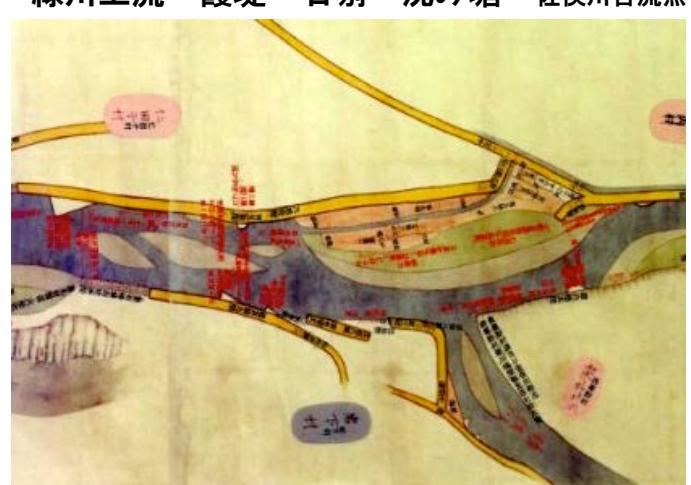
緑川上流



### 霞堤・石刎・沈み塘

次はちょっと下流で、佐保川合流している所の話しです。少し黄色く見える線で示してあるのが堤防です。堰堤が切れたところが何カ所かあります。これは武田信玄が釜無川支流の御勅使川で多用した「霞堤」です。大水の時に水が流れ込み、それを堤防で受けて堤防が強ければ堤防の勝ち、水が流れていくだけです。途中で堤防を切れ切れにしてあり、もっとすごい大水の時はこの切れたところから回りの水田に水を流して、渦流の影響を少なくすると云った手法です。武田信玄が使っていた霞堤が彼方此方に見られます。清正はこの

緑川上流 霞堤・石刎・沈み塘 佐保川合流点



ような基本的な土木の知識を持っていたのではないかと思います。この図は、霞堤の部分をアップにしたもので

この写真は、石刎の一部を橋の上から写したもので。もう一つの写真は横から写したもので霞堤に繋がる所です。非常に丁寧に作ってあって、三角形に水を刎ねるようになっているのが分かります。これも橋の上から写したものですが、川の真ん中に石を貼り付けた縦長の施設があります。沈み堤と呼ばれるものです。この堤防は川の真ん中に作っていますので洪水の時

に水を押さえる堤防ではありません。これは洪水の時にその先端部分を水が洗っている様子です。沈み

### 鶴ノ瀬堰の下流 岩下の石刎発掘



### 上益城郡甲佐町沈み塘 中甲橋より下流



### 大水時の沈み塘

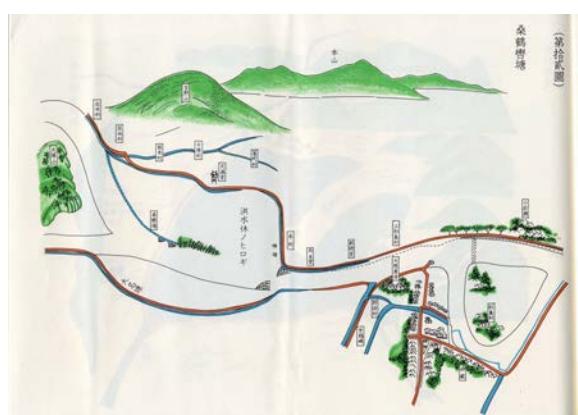


堤の真ん中の部分が頭を出しています。もう少し下手になるとこんな感じです。この堤で2つの流れを作り出しています。今日は土木関係の方も多くいらっしゃると思いますが、我々素人は何のためにこんな事をやったんだろうと思うのですが、この沈み堤を横から見るとこんな景色になります。

### 桑鶴の轡鞆

それからもう少し下流に丸く広がった堰堤が描いてあります、熊本で轡塘（くつわとも）呼ばれていて、菊池川や白川、緑川流域にあります。川が流れてきた部分的に丸っこく堰堤を築いているのです。丸っこい形が馬の口に付ける轡、島津家の家紋（丸に十字の轡の紋）の形をしているので轡塘と呼ばれているのだと思います。今は、この輪郭だけが残っています。大水の時に、回りが冠水しないように堤防を高く作っ

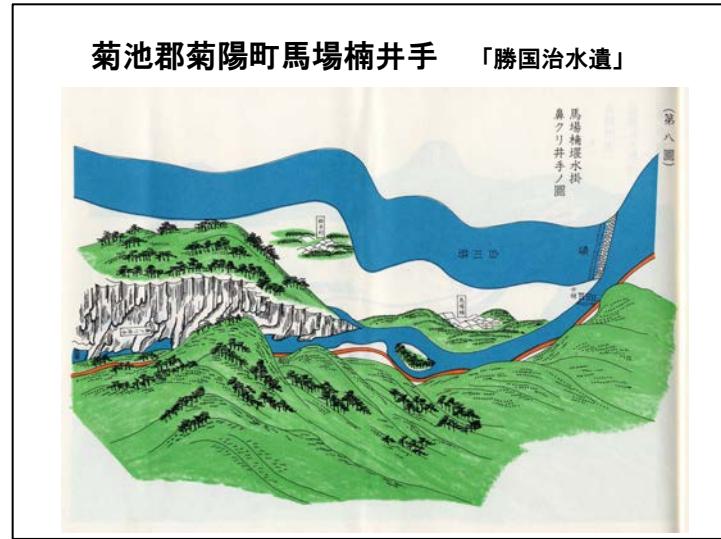
### 桑鶴轡塘



ていますが、今行っても分かりませんが、何ヵ所か低く作って大水の出水がわざと溢水していくような乗越しの部分があったようです。このような川の工事は当時から今まで補強しながらずっと活用していますので、昔の姿が改変されています。そこでで当時と同じものだとは言えないのですが、古い絵図ではいくつか指摘できそうです。

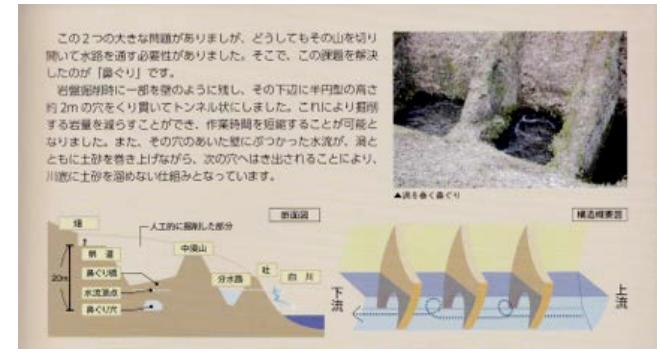
### 鼻繰り井手

次は白川の話です。ここは非常に変わっていて、馬場楠堰から導水される鼻繰り井手と呼ばれるへんてこな施設です。ここが取水口で、一般の堰と全く変わることはないですが、この水路の下流部に仕掛けがしてあります。この黒く見えている部分が水路です。水路と言わても変な水路だなと思います。水路の上に穴が 80 くらい開けてあります。どのような仕掛けになっているかと言いますと、水路の途中に仕切りがあって、掘り残しの部分があるのです。その掘り残しの壁の部分に穴が穿ってあるのです。この図で言うと、台地が伸びてきた先端に用水路があるのですが、用水路の下の方では上に穴の空いたトンネル部分があります。これは現場で配っているパンフレットの絵ですが、右から左に流れてきた水がこの仕切り板の穴を通って渦を巻きながら隣の仕切りに当たって、もう一



遍穴をくぐりながら、下流の方に流れて行きます。現場で見てみると、非常に早い流速で水が流れていますので、怖くなるような渦が巻いています。何のためにこのようなものを作ったかというと、この白川は阿蘇から火山灰を流してくるので、その火山灰がたまらないように、すなわち沈砂の予防のために渦巻きをわざわざ作り出したのだと言われています。本当にそうなのかなという疑問が若干ありますが、他所にないようなトンネルを通して用水路が残されているのです。引っ張っ

### 菊池郡菊陽町 鼻繰り井手 鼻ぐり 約390m もとは80基 現況28基 流水は渦巻く 沈砂施設（沈砂防止施設）と伝える



て行くときに馬は轡を噛ませますが、牛は鼻に穴を開けて輪っかを付けます。その輪っかのようになに水が流れていくので鼻繰り井手と言う名前が付いています。他所では見られないような施設だと思います。

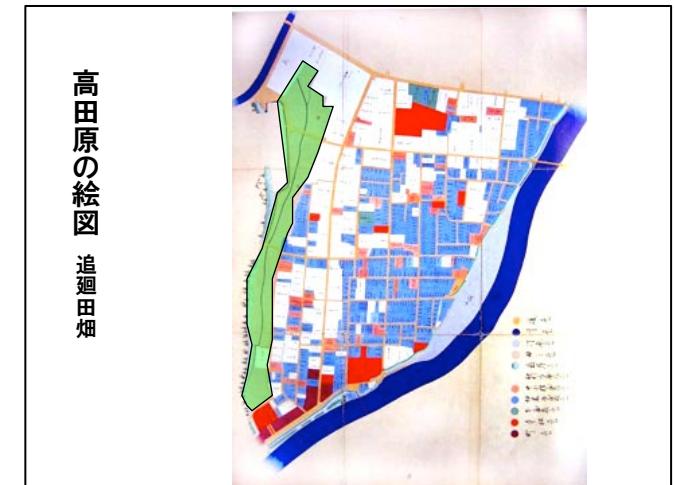
### 白川の付け替え

今までご紹介したのは清正の事業という確証は100%ではないのですが、非常に独創的な治水工事の例です。これからご紹介するのは各種資料・史料で、加藤清正がやった事業にまず間違いない土木事業です。右に地図がありますが、江戸時代の熊本の町絵図です。熊本の町は佐賀と同じで御城を中心に城下町を作っていますが、この部分が熊本城で、回りに武家屋敷と町人達が配置されています。この様な構成は熊本に限ったことではありませんが、これからお話しするこの部分の工事は熊本独自の事業です。

これら当たり、昔は高田原（こうだばる）と呼ばれていました。現在熊本で一番人通りの多い「下通り」になっています。その西側に明治時代の終わり位までは窪地が南北に連続しているところがあって「追廻田畠（おいまわしたばた）」と呼ばれています。こちらが熊本城の側で、これが坪井川で、熊本城の南を流れている川です。窪地が連続していますので、昔、川が流れている跡だろうと想像できます。

城の南を流れている坪井川がこれで、その南を流れているのが白川です。「昔は坪井川が白川に合流していたのではないか」というのが通説で、江戸時代からつい十数年前までそう考えられていました。ところが、清正が生きていた頃に作った国絵図にはお城があって、お城のすぐ下（南）で白川が蛇行していて、その途中で坪井川が合流している描写があります。これは非常に絵画風の表現ですから、白川は蛇行していたんだなという程度に理解されました。坪井川もう少し南で白川に合流していたと考えましたが、むしろ白川が北の方に蛇行して

いたとすると、色々なことが納得できることを発見しました。白川が蛇行していた頃に熊本ではお城



作りをしています。これは江戸時代の熊本城と城下町の絵図に白川が蛇行していた状況を描き加えたものです。最初にこれに気づいた時には、蛇行の始まりから終わりまで 300m 位しかありませんのでそんなことはなかろうと受け止めていたのです。ところが、阿蘇から流れてきてここを流れている水は、後ですぐ近くのここを流れることを知らないのですね。水はまだ低い方に流れしていく訳です。急な蛇行だらうと緩やかな蛇行だらうと水には関係がない訳で、このような流れの方が現場の地形にあってる訳です。

川に面した茶臼山とよばれた小丘陵を中心として熊本城を築きます。熊本城の場合は佐賀城と違って「平山城（ひらやまじろ）」です。低い丘陵の上にお城を造っていますので、周りを石垣で固めています。その石垣の石は熊本市の西側の金峰山と呼ばれる火山の輝石安山岩を使っています。この輝石安山岩は 400 年前に切り出して細工をするには一番適した石でした。大坂城あたりは小豆島の花崗岩を使っていますが、輝石安山岩は花崗岩より柔らかな石です。当時、石垣用の大きな石材はこのようにして運んでいます。

当時の白川はこのように流れています。緑色がお城の場所です。この辺りが石垣の石を採ったといわれている所、ここが野越し用の石を採ったところ（トル）です。運ぶのにはこの流路を使っていたのではないかと思います。私は今のところメインとなるのはこの赤いルート、白川を使って石を運んだのではないかと考えております。その石垣の石を運んできて、運び終わったところで蛇行を直線化

## 白川流路Ⅱ期

**慶長4年頃  
(熊本城 i 初期)**



## 熊本城築城時の白川流路と石材产地



## 石を運ぶ 修羅 小豆島残石公園



したと考えています。直線化することで次のようなメリットが出てきます。まず、城下町の外縁に移つ

たことで白川が外堀になります。外堀は防衛ラインです。蛇行をまっすぐにしたことで洪水から城下町を守る役割を果たします。また、城下町を旧河川敷に拡張できます。蛇行で分断された町が一体化した町に整備されます。坪井川の流れを変えて堀の役割を持たせます。城下町を貫流している坪井川は運河の役目を果たしますし、生活用水、防火用水にもなります。熊本は、夏は暑いところですが船遊びの娯楽の場にもなったのです。石を一個投げて2羽の鳥を捕ることを一石二鳥といいますが、一つの土木工事をやって今話しただけで9つの役割を果たさせています。

もう少しあるのですが、書ききれないで省きます。書いたものだけでも一石九鳥にもなります。

## 白川蛇行の利用

築城の多量の用材（石材・木材）は水量豊富な大河川・白川を利用して運ぶ



## 白川の直線化



## 白川の直線化の効果

- 白川を城下町の外郭ライン
- 外郭ラインは防衛ライン
- 洪水から城下町を護る
- 城郭と城下町を旧河川敷きに拡張
- 分断された町を一体化
- 坪井川が城郭の堀の役目
- 貫流する坪井川は物流の運河 水量の安定した坪井川
- 生活用水・防火用水に利用
- 納涼など娯楽の場



## 熊本城の石垣の変遷

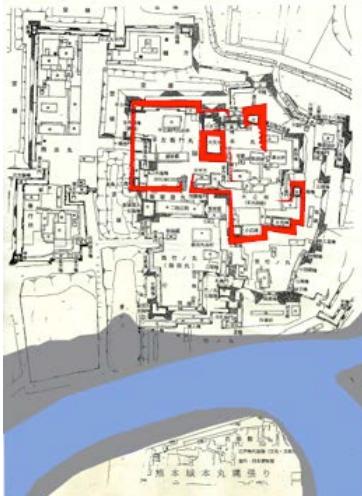
熊本城は石垣が有名ですが、この重なった石垣では、構築の前後差を観察することができます。この石垣を作った後、こちらの石垣を追加しています。熊本城は武者返しの石垣が有名ですが、途中まで上った武者が、上の反りで引き返すというのが武者返しです。右側の方が武者返しの石垣で、左側のは武者登れずの石垣と呼んでいます。これは熊本城で一番古い石垣で、次がⅡ期目、Ⅲ期目、Ⅳ期目、Ⅴ期目、Ⅵ期目と続きます。これを平面

## 加藤清正公築城の名城 熊本城の石垣の変遷



図に表しますとこのような順で築かれたことが判明します。下の方がまだ直線化する前の白川と、改修後単独で流れる坪井川です。ここに慶長4年頃、城が造られます。南西にのびて、Ⅲ期目、Ⅳ期目と延びていきますが、まだ白川は蛇行しているのです。大方の工事が終わったⅣ期の築城後に白川を直線化させます。ここまででは清正さんが生きていたときの作業です。2代目の忠広の時に一番下の竹ノ丸から古城までの曲輪と小天守や飯田丸五階櫓などが移築されて土休合の土城ができ上がります。細川家が土

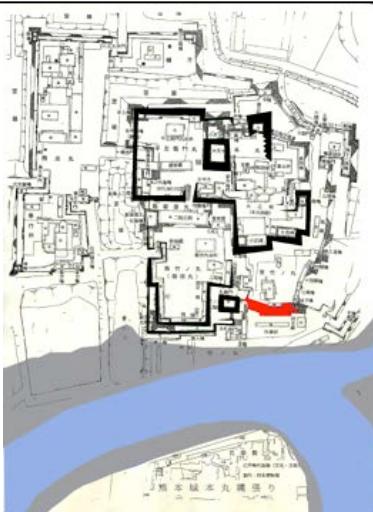
第Ⅰ期 慶長4年



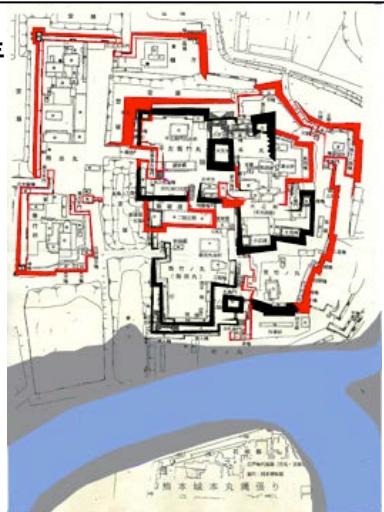
第Ⅱ期 慶長5年頃



第Ⅲ期 慶長6年初



第Ⅳ期 慶長6-12年



慶長14-15年頃

(加藤清正没16年)

白川蛇行の直線化と  
坪井川を独立させる



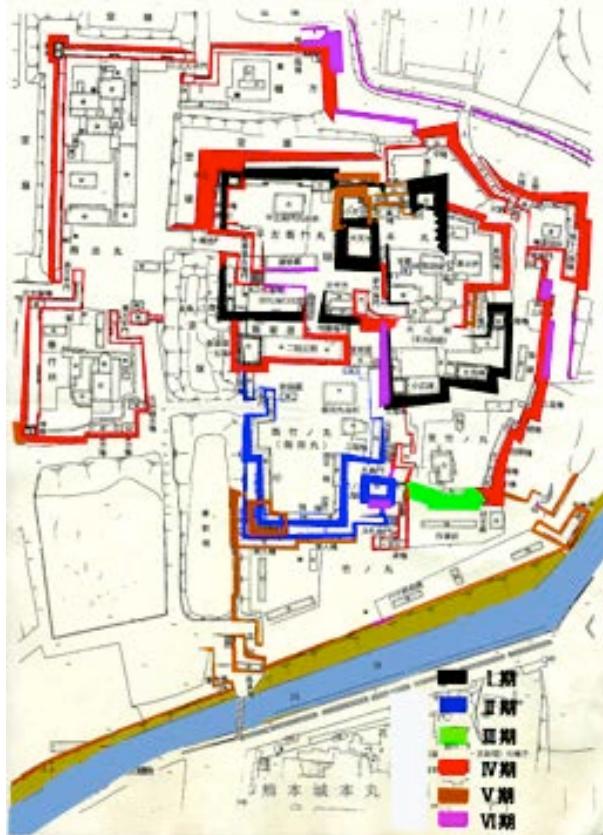
第Ⅴ期慶長末一元和

加藤家2代 忠広時代



観光で熊本城に来られると、二の丸のバスの駐車場から天守閣に行って、本丸御殿や天守閣を見ただけでパッと帰るというのが通常のコースです。お好きな方だと石垣を見ながら歩いていくとこれだけ石垣が移り変わっていますので、それも見所の一つです。

### 熊本城構築過程



熊本城は明治 10 年の西南戦争で焼けてしまいますが、その前に写した写真が結構あって、これは南の方からお城の中心部をのぞんだところですが、真ん中に大天守が聳えています。こちらは、熊本城と城下町を丸ごと写した写真です。熊本駅の隣に花岡山という小山がありますが、その上から城下町を写したもので、JR がこここのあたりを通っていますが、こらあたりが新町、その内側のちょっと小高いところが熊本城の石垣です。一番高いところに天

### 往時の熊本城をたどる



守閣があります。その天守閣と周りが明治 10 年に焼けましたので、たくさんの写真を見るとき、天守閣が写っているか写っていないかで明治 10 年より前なのか後なのかが分かります。明治以降のお城の移り変わりが写真でよみがえってきます。

そろそろ時間ですので話を終わらせていただきますが、ここにおられる方はほとんどインターネットをおやりになると思います。熊本市のホームページに熊本城の動画を配信している「くまチャンネル」というサイトがあります。そこに、1. 熊本城みである記、2. 熊本城をめぐる、3. 名所旧跡みである記というコーナーがあって、熊本城の様子を動画で配信していますので、是非クリックしていただければと思います。熊本のケーブルテレビで月に 1 本製作したものをアップしていて、15 年分くらいあります。そこで、全部見ると 20 数時間かかりますが、インターネットの場合はビデオと違って見たいところだけクリックすれば 20 数時間もずっと見続けなくてもよいので、是非ご覧になっていただきたいと思います。古い時期の動画にはまだヒゲの黒い私が出で参ります。

本日は、どうもご清聴頂きありがとうございました。

花岡山より城下町全体を望む 明治5年頃



### 講演3 大串浩一郎（佐賀大学大学院教授）

## 「成富兵庫と加藤清正の治水の思想と技術」

皆さん今日は。ただ今ご紹介戴きました佐賀大学の大串です。先ほど富田先生の方から加藤清正の話を詳しくお話しして戴きました。かなり重複するところがありますので、そこは省かせて戴きます。今日の配付の資料ですが、だいぶ色が濃くなって見えなくなっているのでスクリーンの方で見て戴きたいと思います。

## 全国の治水技術の系譜

最初にこの図は、戦国から江戸期にかけて著名な治水工事が全国で行われたことを示したものです。今日お見えの岸原先生が作られたものを使わせてもらっています。武田信玄の富士川の治水、加藤清正、成富兵庫茂安の治水はよく知られていますが、それ以外に、日本全国、戦国から江戸期にかけて行われた治水事業があります。

この図は先ほどお話しに出てき

ました竹林征三先生が作られた表です。「戦国武将の治水と流派」ということで、武田信玄の甲州流から始まって、佐々成政の常願寺川の事業、加藤清正、成富兵庫、伊奈忠次の事業に続き、紀州流の大畠才蔵、井沢為永などの事業があります。先ほども説明がありましたが、佐々成政は越中富山の常願寺川で治水事業を行っています。その後、佐々成政は肥後を治めますが、一国一揆の責任を取って切腹をさせられ 1588

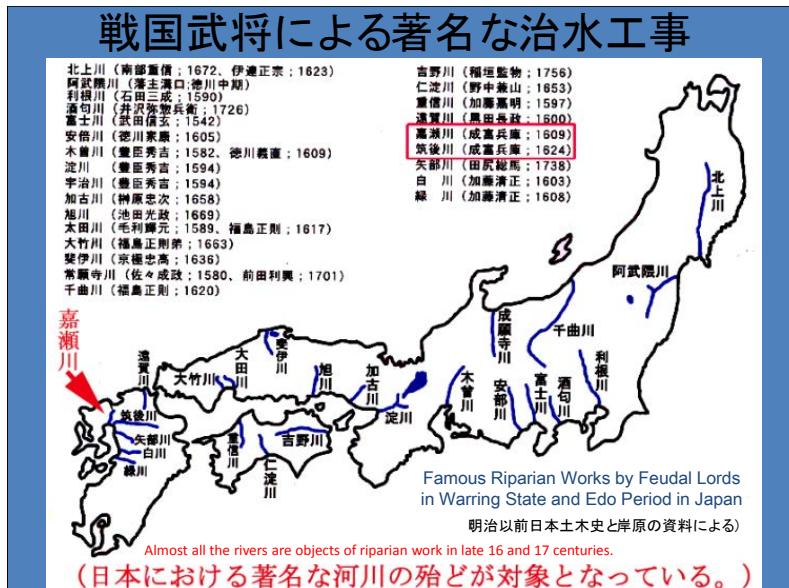


表1 年表・戦国武将の治水と流派

年に亡くなります。その時河川工事を担当していた大木兼能（かねよし）らには罪は無いと言うことで加藤清正に仕えて、治水事業にかかります。その時、同じ越中の出身で曾根孫六・孫七・孫八等も加藤清正に仕えます。彼らは潜りの名人です。後で絵が出てきますが、河川で治水を行

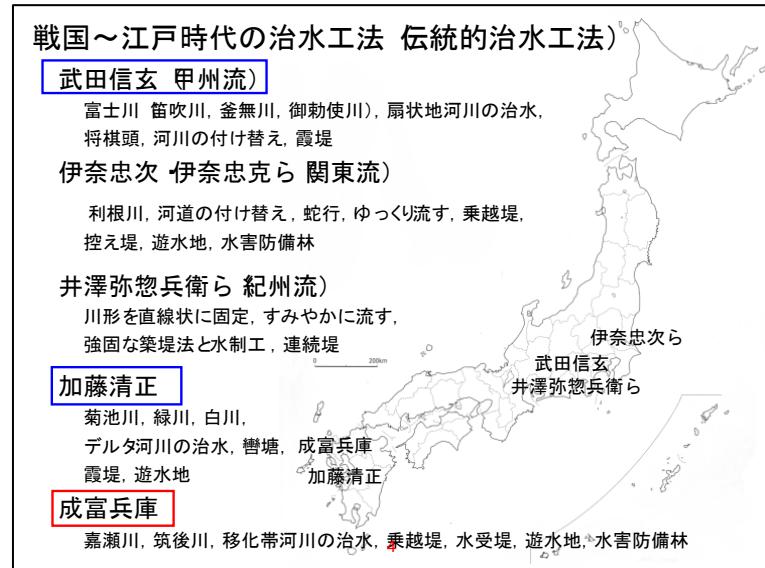
うときに水の表面だけ見ていたのではなかなか分からないので潜って中がどうなっているかを見定めたそうで、孫六・孫七・孫八で3孫と呼ばれていますが、彼らも活躍します。

戦国から江戸期にかけての治水工法としては、このような工法がありますが、非常に有名なのは武田信玄の甲州流です。この手法は富士川、その支流の御勅使川（みだいがわ）などの治水に使われています。竹林先生の本に依りますと、この工法は扇状地に於ける治水手法と言われています。中国の長江の支川の岷江という川に都江堰が作られていますが、これも扇状地における治水事業です。武田信玄は中国の文書をたくさん勉強していて、都江堰のことは知っていたといわれています。将棋頭も新御勅使川に用いた手法で、少しずつ水性を弱める工夫をしています。これら河川の付け替えや霞堤などを多用する手法は、甲州流と呼ばれています。

九州では加藤清正、成富兵庫の治水がありますが、ここでも霞堤や轡堰などの手法が用いられています。それ以外に、関東流とか紀州流とか呼ばれる手法があります。これらは全国規模の手法で、関東流は関東郡代を代々やっていた伊奈家流の治水技術で、利根川野付替えや、蛇行させてゆっくり流す手法などを用いています。江戸の中期くらいになると紀州流と呼ばれる手法が導入されます。川はできるだけ真っ直ぐにして速やかに海に流すという手法です。全国規模の治水工法から九州は離れていましたので、このような流れとは異なってきます。

### 加藤清正の治水技術

この表は加藤清正と成富兵庫茂安の活躍の時期を並べたものです。戦国時代から江戸期に入るために、朝鮮出兵などもあって加藤清正と成富兵庫茂安は非常に親交が深かったということが分かります。肥後の大工の棟梁の善三という人の覚え書きに、兵庫がしばしば清正の治水を視察したことが書かれています。先ほどご紹介のありました鼻ぐり井出も



加藤清正 肥後入国後鳴牛浦	西昌	成富兵庫安 鍋島氏に仕えて以降鳴牛浦
(27歳) 肥後北半分を与えられ、25万石あるなどなる 開拓に力を入れる	1588	(29歳)
肥后川改修・于那工事開始～1605(8年)の改修	1589	
天正一揆討伐で小西氏の応援 (肥前鍋島らに応援命令)	1591	天正一揆討伐応援に参加
篠原城(美作)～1611 篠原城(吉川)～	1592	清正より天正一揆の功として絆を授かる
肥前名護屋城の築城指揮官任命される 朝倉氏の先手を奪われる	1593	前名護屋城築城に参加(設計、造営)
竹末浦、進屋浦、某切浦、古崎(五島郡佐世・・佐賀) 前山城	1594	鍋島直茂に依頼して朝倉出兵跡跡に参加
篠原により前山城を攻撃する 間が短の間に(東京)	1595	前山城築城先鋒を承る
間が短の間に肥後土25万石を拝領	1596	鍋島が前山城戦い(鍋島氏に敗れて退軍)
鍋の難應・河川改修(肥前)～1607	1597	鍋島直茂に勝利して篠原を中心に鍋島治体制を確立し 佐賀藩の危機を回避
熊本城築城～1607	1598	熊本城築城に清正の片腕となり参加
城下町整備開始～1607	1599	(以降、毎年2月正より親衛を領く)
水路整備に着手	1600	江戸幕府にかられ江戸の町の修理。
江戸城築城奉公令が下る 台所分離・坪井川付替。	1601	江戸城築城奉公令が下る
石垣(背割堤)・白川・坪井川)、 二本木堀(台川)、杉島寺坂(横川)、 清正堤(柳原川)～1604、八重堤(柳原川)、 九重堤(横川)～1606、柳原川付替～1608、 諫川の善隣～1610、 通津堀・萩原堤(肥前川)、 尻手堤(台川)～1609、 熊本城完成(熊本・熊本)	1602	石垣直茂に勝利して鍋島を退かす
馬頭塙(白川)、 尾張名古屋城築城に主としてあたる	1603	鍋島直茂に勝利して鍋島を退かす
	1604	鍋島直茂に勝利して鍋島を退かす
	1605	鍋島直茂に勝利して鍋島を退かす
	1606	鍋島直茂に勝利して鍋島を退かす
	1607	鍋島直茂に勝利して鍋島を退かす
	1608	鍋島直茂に勝利して鍋島を退かす
	1609	鍋島直茂に勝利して鍋島を退かす
	1610	鍋島直茂に勝利して鍋島を退かす

成富兵庫と加藤清正の活躍の略年譜

#### 治水に関わった主な期間

清正 1600～1610年  
兵庫 1610～1625年

清正が本格的に治水を行った10年間は、兵庫の歴史上の空白の期間となっている。兵庫は、この期間に熊本の治水技術を学んだ。熊本での治水が一通り完成後、兵庫は佐賀の治水事業を開拓した。

加藤清正	西昌	成富兵庫安
加藤清正没(6月24日)、子忠広が家督を継ぐ	1601	大坂・小豆の陣(西昌方)～戦国時代の終焉
鍋島の築城～1623(鍋島城、多布施川)	1604	石井浦の築城～1623(鍋島城、多布施川)
藤原高虎が肥後監督役就任	1615	時の江戸堤(多布施川、田手川)
	1617	砂水堤(柳原川、田手川)
	1618	佐賀川の分水堤、千曲上堤(筑後川)
	1624	三右衛門(城原川)、永池堤(北九町)
	1625	鍋芦川水堤(嘉瀬川右岸分水路)
	1632	成富兵庫安没
	1634	細川忠利が肥後54万石を拝領

見学したとの記録もあります。清正が本格的に治水を行ったのが10年間で、この間は、兵庫は治水事業をあまりやっていません。その間に結構清正の所に行き、江戸城の築城に清正と一緒に参加するなどして色々な技術を学んでいったものと思われます。清正が治水を行った10年間では、白川や菊池川や緑川の治水を行っています。その後、1614年ごろから石井樋の築造が始まりますが、この頃には加藤清正は亡くなっています。加藤清正から学んだ技術に新しいものを付け加えた技術で石井樋、蛤水道、大日堰、西芦刈水路などの事業を行っています。

これは子供向けの絵本「土木の歴史 読本第2巻 川を治め水と戦った武将たち 武田信玄・豊臣秀吉・加藤清正」からとったものですが、加藤清正の下で活躍した曾根孫六・孫七・孫八は川潜りの名人でしたが、枠殻や瓢箪などを流して水がどのように渦を巻いて流れかを、表面だけでなく中まで調べさせたことが記録に残っています。築城には近江から穴太衆を連れてきています。

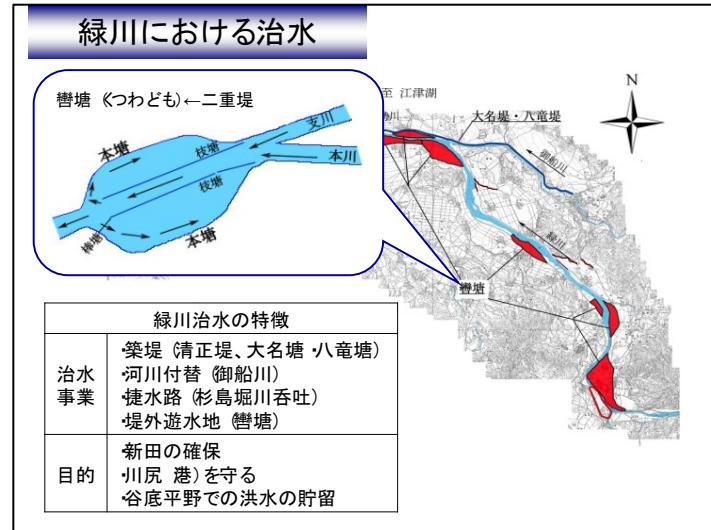
これも先ほどの富田先生の話と重なるのですが、白川と熊本のまちづくりです。これが白川です。ここに旧流路があって、これが坪井川です。先ほどの富田先生の話ですと、白川がこのように流れしており、白川を直線化して、坪井川を分流させます。旧熊本城はここにあったのですが、新たに熊本城を高台の上に造り直して、武家屋敷や町人町をここに作っています。白川は阿蘇の上流部から火山灰の供給がありますので、そのヨナが堆積しないような工法を考えました。

次に、南側の緑川ですが、ここでもいくつか河川の付け替えを行っています。緑川の支流の御船川を付け替えていて、こちら側に流れていたものを、こちら側に付け替えて緑川と御船川を合流させています。また加勢川がありますが、この加勢川と緑川と白川を熊本城の外堀として用いています。この加勢川に清正堤がありますが、片側にだけ堤防が設けられており、堤防のない側

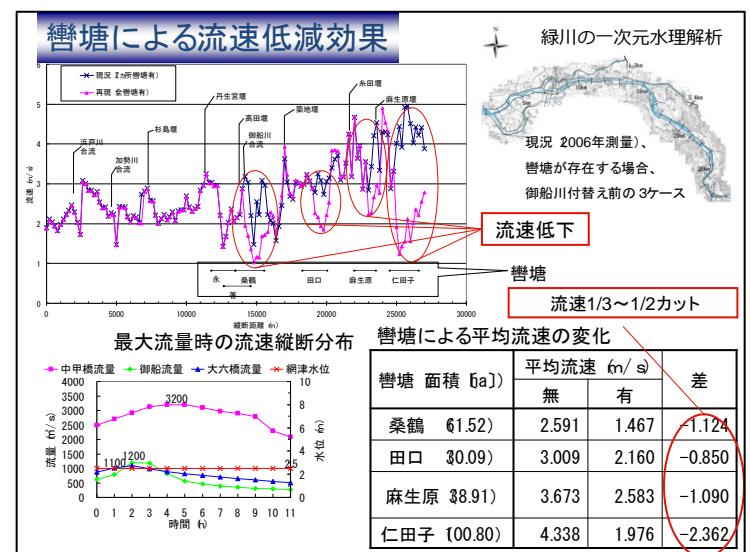


は遊水地になっています。またここには有名な轡塘が設けられています。轡塘は、二重堤構造で、河川工学では堤内遊水地と呼ばれ、逆流させて水の勢いを弱めて堤防の中の川の敷地内に水を貯める仕組みです。御船川と緑川を合流させることによって、合流部分が弱くなりますのでそれを補強する意味で轡塘が設けられます。このような轡塘があちこちに作られています。桑鶴の轡塘はここにあります。鵜ノ瀬堰はここにあり、石刎がここにあります。私も以前緑川の調査を行ったとき、先ほど富田先生の話にもありました永井さんに案内して戴いて現地を見て回りました。

この図が轡塘の詳細図です。二重堤になっていて、枝鞆（えだとも）があって、枝鞆から逆流する形で本鞆に囲われているところに水が流れ込みます。これが永の轡塘の現地の写真ですが、枝鞆があって本鞆があって、ここに水を貯めます。



私は土木で水利学を教えていましたので、轡塘の効果を定量的に求める計算を行いました。この図の横軸は、緑川の下流から上流に取った距離で、縦軸に流速を取りています。昔はたくさんの轡塘がありました。現在は2箇所です。轡塘があると流速がどのように変化するかを調べましたが、現況



に比べて全ての轡塘がある場合は非常に流速が低下します。桑鶴、田口、麻生原、仁田子がある場合は、流速が 0.8m/s 以上低下します。まず轡塘によって流速を低下させる、すなわち水の勢いを削ぐ効果があります。

他にも加藤清正の独創、知恵が見られます。先ず、河流の馴染みを付ける知恵です。河道の付け替え、分流を行って河道に馴染みを付けます。坪井川の付け替えによる白川の改修や、御船川の付け替えによる緑川の改修などがこれに当たります。次に斜堰の知恵です。斜堰の利点は、斜堰でも川を流れる流量は同じですが、堰に直角に流れますので流速は遅くなり、流体力が小さくなります。鵜ノ瀬堰では両方からハの字型に斜堰を置

くことにより、川の水で以て水を制することができます。また堤塘（ていとう）の知恵として、白川、加勢川の清正堤、緑川の大名堤、桑鶴の轡塘などがあります。次が石刎の知恵、馬場楠の鼻ぐり井手の知恵です。また、洪水到達時間差の知恵というのもあります。昔から白川は阿蘇の外輪山の中で黒川と合流します。下流で治水を行うときに、白川と黒川の洪水がやってくる時間をずらせば、どちらかを遅れさせることができれば、下流を助けることができます。また、「しばしばね」と呼ばれる二重石垣を作つて、どちらかが壊れても、もう一つの石垣で守つたと云うもあります。緑川の河口で大曲を設けた「大曲」の知恵があります。また、白川の瀬田井樋で堰が壊れ、すぐには修理用の石を持って来られないで地元の人は困りましたが、加藤清正が近くに石が埋めて用意しておいたということで、地元の人は非常に感激したと言われています（替石の知恵）。最後は、堆砂対策として立岡池に作られた殻堤（からづみ）の知恵です。これらの事柄が清正の構想だと言われています。下の図は鼻ぐり井手の水利機能を表した絵で、流れが 3 次元的に交互に渦を巻くことにより、ヨナ（火山灰）が堆積するのを防ぐことができることを示しています。これらが加藤清正の技術の中で独創的なものの全貌です。

### 成富兵庫茂安の治水技術

それに対して嘉瀬川の治水ですが、嘉瀬川の場合もこの図のように川の中に遊

### 清正の独創・10の治水の知恵

竹林征三著：『治水の神様』の系譜  
谷川健一編：加藤清正 藩城と治水より

- (1) 河流の馴染みをつける知恵 河道付け替え、分流 背割り石塘)  
坪井川の河道付け替えによる白川改修  
御船川の河道付け替えによる緑川改修
- (2) 斜堰の知恵  
白川の瀬田堰、馬場楠堰、渡鹿堰、緑川の鵜ノ瀬堰
- (3) 堤塘の設計の知恵  
白川の石塘、加勢川の清正堤、緑川の大名塘、桑鶴の轡塘
- (4) 石刎技術の知恵
- (5) 馬場楠の「鼻ぐり井手」の知恵  
白川中流の馬場楠堰からの導水（井手）、阿蘇のヨナ排砂促進の工夫
- (6) 洪水到達時間差の知恵  
白川と黒川
- (7) 「しばしばね」二重石垣の知恵
- (8) 大曲りの知恵  
緑川河口付近の大曲り
- (9) 替石」石備蓄の知恵  
白川の瀬田井樋
- (10) 殼堤」の知恵  
宇土市南東の立岡池の殼堤（ダム堆砂対策）

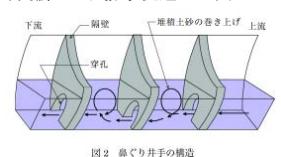
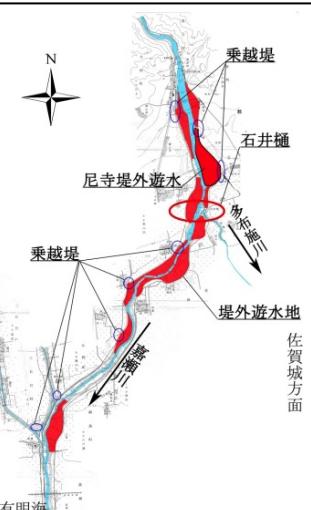


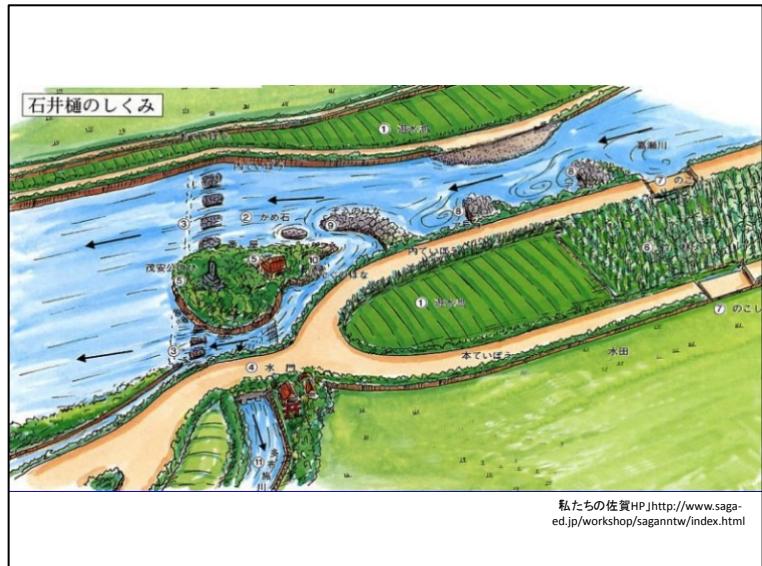
図2 鼻ぐり井手の構造  
高木・浪平・小林：  
造橋 鼻ぐり井手」が持つ水理機能の評価  
宇土市南東の立岡池の殼堤 ダム堆砂対策)

### 嘉瀬川における治水

嘉瀬川治水の特徴	
治水事業	目的
河川付替(体川、祇園川) 石井樋 堤外遊水地(尼寺など) 堤内遊水地 乗越堤 水受堤 放水路	佐賀城下を守る 祇園川合流より 上流での洪水の貯留



水地を作っています。堤防の外側、川の中に作られた堤外遊水地をたくさん作っています。ところが嘉瀬川では川の中だけでなく川の外、すなわち堤内地にも遊水地があちこちに作られていました。この図は小学生向けの石井樋の説明図ですが、ここが石井樋で、この位置に野越があつて堤外遊水地（河川）があつてもう1ヶ所ここに野越があります。ここからゆっくりと外に流していくのですが、土砂は囲繞堤（いじょうてい）の竹林で振り落とされて、ここからは流れるのは細かい粒子だけで、むしろ農地が肥沃になるというプラスの面もあったと言われています。このように堤内地、川から外に溢れさせるやり方が佐賀のやり方です。富田先生のお話で熊本でも川の水を外に溢れさせる



### 洪水の堤内地処理

#### 水受堤

洪水を堤内遊水地へ溢れさせた後、流水から集落などを守るために作られた小高い堤防



### 嘉瀬川尼寺遊水地と石井樋付近



15

ことがあったと云われていましたが、我々が調査したところではその様なものを見つけ出すことができませんでした。

これが嘉瀬川の尼寺の遊水地です。紫で丸をしたところが野越と呼ばれるもので、ここで左岸側、右岸側の水をこぼれさせました。これは洪水の堤内地処理を行うときに用いる水受堤（みずうけてい）です。人の背に比べて高くなっていますが近くには川は流れていません。このような水受堤が佐賀平野にはあちこちにあります。



### 水受堤と横堤 河畔林

堤外遊水地と横堤により流速が落ちた洪水は、逆流しつつ乗越堤を越流する。

堤防上の河畔林により更に緩やかに平野部に流入する。

しかし、水受堤により佐保の集落は保護されている。

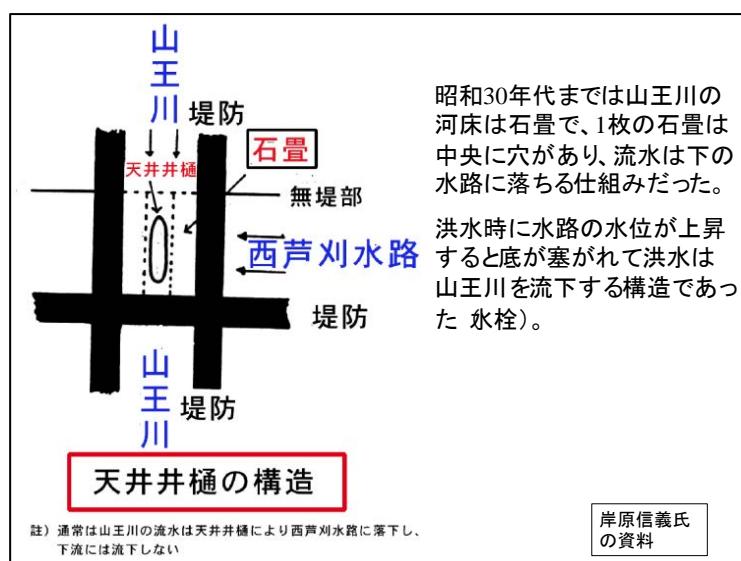
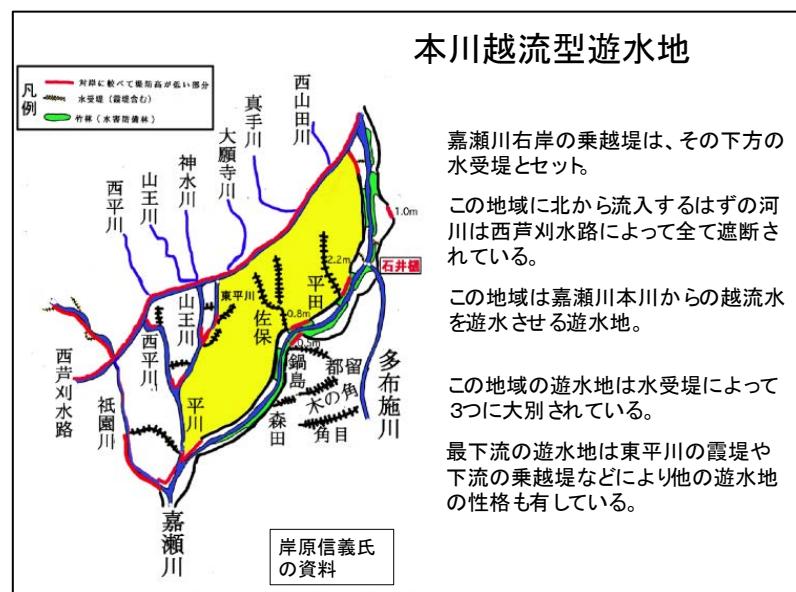
岸原信義氏の資料

17

今でも残っているところもありますが、だいぶ圃場整備などでなくなりました。

これは昭和 23 年に米軍が撮った航空写真ですが、右岸・左岸側に堤防があって、ここに野越しがあります。野越しあは少し低くなっていますので、洪水の時にはこの野越しから水田に水が流れていき、本川の洪水の威力を弱めることになります。ここに集落がありますが、この集落を守るために水受堤（みずうけてい）が設けられています。水受堤はあちらこちらにあります。水がどこまでくるかというふことを緻密に計算しておかないとこの技術は使えません。堤内地を含めた流域治水で、非常の壮大でかつ緻密な治水を行っているというのが、佐賀の治水です。

これも岸原先生の資料ですが、本川から越流させたところに水受堤があつて貯留を行います。この西芦刈水路は利水用の水路ですが、左岸側の堤防が高くなっていて、北の山から下りてきた水は堤防で受けられて西の方に流れていきます。この山王川は繋がっているように見えますが、実は繋がっていないのです。この図は山王川と西芦刈水路が交差しているところの構造を示したものですが。通常、山王川の水は穴の空いた天井井樋から下を流れる西芦刈水路に落ちて、水路から南には行きません。洪水時に水路の水位が上昇すると、底が塞がれた形（水栓）になり、南側の山王川を流下する仕組みになっていました。自然の力を利用した治水

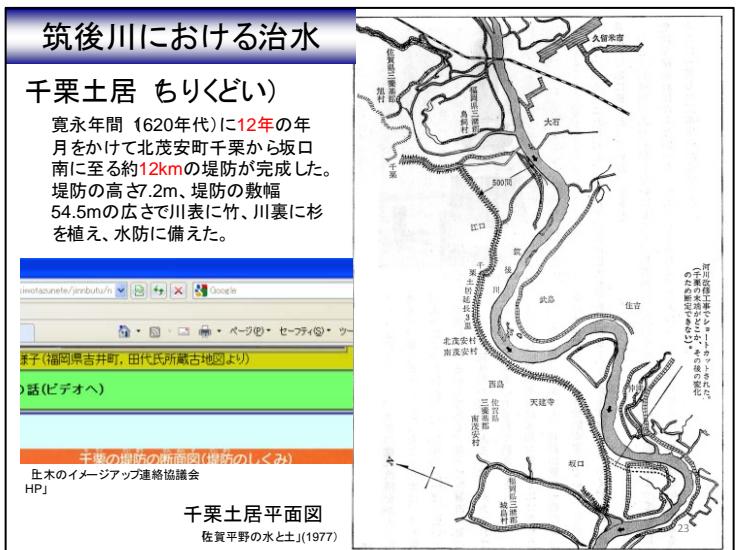
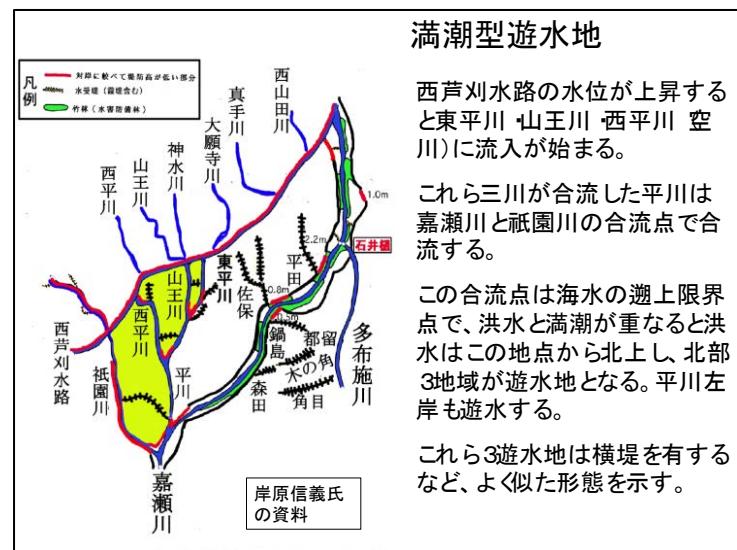


になっています。

南側では嘉瀬川支川の祇園川と嘉瀬川本川が合流して有明海に流れて行きますが、この合流地点は有明海の潮汐の影響を受けます。洪水と有明海の満潮が重なったときには水が出ていきません。その時は、こここの野越からここに溢れさせて一時水を蓄えます。この遊水地と、こちらの遊水地ともう一つの遊水地のそれぞれが全く別の役割を持っているのが佐賀平野の治水の特徴です。川の中での治水だけでなく、川の外、我々が住む堤内地を含めて流域全体で治水を行っています。

次に筑後川の治水においては、1620年に12年の年月をかけて12kmの堤防、有名な千栗土居（千栗と書いて「ちりく」と読みます）を川から少し離して作っています。川から少し離して作る工法も加藤清正と共通したやり方です。堤防の中にハガネと呼ばれる粘土質の土を入れて堤防を切れにくくしています。また、堤防の川側には竹を、外側には杉を植えています。

清正の治水と兵庫の治水を比較したものがこの表です。清正の治水は兵法の実践から多彩なアイディアが導入されています。すなわち河川の技術は軍事技術の応用されたものが多いのです。また部下の知恵を集めています。それに対して兵庫の治水は地域の特性を知り尽くしたことから編み出されたアイディアを用いています。また清正のアイディア



知恵の根源(アイデア)	清正の治水	兵庫の治水
兵法実践から多彩なアイデア(部下の知恵を集める)。	兵法実践から多彩なアイデア(部下の知恵を集める)。	この地を知り尽くした者からくる卓抜したアイデア。
治水	河道付替(合流点対策)轡塘(連続堤と游水地)と二重堤システムに重点。	野越と尼寺林。
取水システム	低い斜堰で堰軸に沿う流線で取水。	象の鼻、天狗の鼻で流線を逆流させて取水。土砂制御の知恵。
河川調査	洪水による流勢水当たり調査。	水利模型実験をやっている。
維持管理	井桶には長刀を持たせた番人を置き、井桶に触る者あれば討捕ること。	草堰等に見る毎年の凌濛等維持管理の重要性を説く。
水問題の課題	河川中流部から下流部の治水、利水。新田開発、干拓に重点。	佐賀平野という日本列島の中で最難物な水問題の解決に取り組む。グリーンと江湖、用水と排水、淡水と海水。

表5 清正と兵庫の治水の類似点と相違点

嘉瀬川の治水は緑川の治水を参考にし、嘉瀬川の流域の特性に応じて独自の工夫が加えられ発展した。

竹林征三著：治水の神様の系譜  
谷川健一編：加藤清正豪傑と治水Jより

を参考にしたものもあります。河道付け替えと轡塘が清正の治水技術で、一方兵庫の治水技術は、河道付け替えもありますが、野越や尼寺林などが特徴です。利水関係では、清正の斜堰に対して、兵庫は石井樋のような土砂の堆積を考慮した仕掛けを作っています。

佐賀平野は、水問題を考える上では日本で一番難しい場所で、成富兵庫はこの問題に取り組みました。佐賀平野の水災害の課題としては、この図にあるような様々な問題がありますが、一番の問題は有明海の存在です。もう一つは嘉瀬川の土砂の生産量が大きいことです。これらの問題がお互いに関連していますので、佐賀平野の水問題を考えるには個別ではなく総合的に関連づけ、治水と利水の両方に配慮して考えていく必要があります。

成富兵庫茂安の総合システムの知恵として、石井樋の知恵、堤外遊水地を含む二重堤の知恵、野越と人工林の総合システム、千栗土居のハガネ技術、そして最後に「河川の維持管理を怠らない工夫」として、毎年春に「干落ち」を行って、石井樋の天井石に刻まれた観音様に感謝し、一週間嘉瀬川筋の川さらいを行うことが行事化されていて、河川の維持管理を怠らない様にしていました。ソフト的な治水が仕組まれていたシステムと言えます。

時間になりました。清正の治水と兵庫の治水は、色々と独創的なところがありますが、根本的なところでは非常に似通った治水を行っていると思います。ただ、佐賀平野の治水は熊本の治水とは違う難しい問題があります。一つは有明海の潮汐で、

もう一つは土砂の流入の問題です。それに対処するため、清正の治水を応用して更に進歩させたのが成富兵庫の治水だと思います。

ご清聴有り難うございました。

### 佐賀平野・水災害の課題

竹林征三著：『治水の神様』の系譜  
谷川健一編：『加藤清正 築城と治水』より

- (1) 江湖の存在
- (2) 佐賀市以東の川は全て筑後川の支流であること
- (3) 嘉瀬川は砂礫運搬の多い川であること
- (4) 江湖、筑後川流入支川、嘉瀬川は用排水クリークでお互いに繋がっていること
- (5) 上記の諸河川の横たわる大地は有明海の干陸化と干拓により作られており、地下水の存在は表流水と一体、連続していること



佐賀平野の水問題を解決するためには、上記の5つの課題を別個にではなく、相互関係を治水と利水の両面、用水と排水の両面からシステムとして捉える総合的に深い知恵が求められていた。

### 成富兵庫の総合システムの知恵

竹林征三著：『治水の神様』の系譜  
谷川健一編：『加藤清正 築城と治水』より

- (1) 石井樋の知恵  
元和年間に作られた兵庫の自信作。嘉瀬川から多布施川への分流施設。荒籠、大井手堰、象の鼻、天狗の鼻、亀石 多布施川を土砂障害から守る
- (2) 二重堤防の知恵  
嘉瀬川の尼寺堤外遊水池の周縁堤の独創性
- (3) 野越しと人工林による総合システム  
城原川、嘉瀬川などで大洪水に対応し、同時に耕地を荒らさないように人工林で荒い土砂を汗止し、堤内地の農地を肥沃な泥で客土
- (4) 千栗土井 もりくどいの はがね  
兵庫が12年の歳月をかけ、筑後川右岸側に延長12kmに渡って作った堤敷60m、堤防高8mで真ん中に「はがね土」のコアが導入された。堤外には15haの広大な遊水地も用意。
- (5) 河川の維持管理を怠らないような工夫  
石井樋の石闇は毎年春に締め切り「干落ち」をし、石闇天井岩に刻まれた観音様に感謝し、1週間の間、多布施川筋一帯の川浚いを行ふ慣習

## 講演4 服部二朗（さが水ものがたり館）

### 「富国の道・利水事業—2人の武将の技比べ—」

嘉瀬川交流軸の事務局長で、さが水ものがたり館成富組みの組員の服部と言います。私が生まれたのは加藤清正の生誕地から電車で15分くらいのところで、木曽川沿いの愛知県弥富です。「成富兵庫茂安との技比べをして」と館長から言われ、加藤清正とは同郷ではありますかが虎退治くらいしか知りませんので今回改めて勉強させて貰ったのですが、前に3人の話がありましたので、随分楽になりました。技比べと云いながら、既に3の方の説明がありましたので、だいぶ飛ばして話ができるようになりましたので、成富兵庫茂安のことを詳しく説明する形で進めていきたいと思います。

#### 富国への道

テーマとなった「富国の道」というのは、石井樋公園の中之島の中に立っている水功の碑にも記してあります。これは明治24年に成富兵庫茂安の事跡をきちんと調べて後世に残そうという事業として建てられたものです。題字を書いたのは成富兵庫茂安とは親戚筋に当たる副島種臣で、中身を調べて書いたのは日本がアメリカ・ヨーロッパ

成富兵庫茂安の治績 佐賀藩の水利事業は茂安の提案で始まった

「大阪一乱ノ後、勝茂公へ申上シハ、家康公御威強キニ依リテ天下早一統仕リ候、(中略)然レバ御領内水損旱損所、又山野海辺新地ニ物立ベキ所見立候テ 御為ニ相成ル様ニ致シ置ケ可キ由申上ル、公御感成ナシ、尤ノ事也、然レバ領分ノ儀兵庫ニ相任セラレル旨ノ仰出サルニ依テ、茂安頓ニ所々ヘ相勵、大分ノ新地ヲ物立、水ノ旱ノ損失ニ無キ様ニ水筋ヲ見計リ或ハ水分ケヲ定メ或ハ堤ヲ築キテ水ヲ堵ヘ万代不易ノ施ヲ致シ置キヌ、希代ノ才智ナリト諸人是ヲ感ス」成富家譜下巻

関ヶ原の戦の後、勝茂公に「家康公の威は非常に強いので早々に天下を統一するでしょう(中略)御領内の水の害、日照りの害の起つそうな所、又山野や海辺で新田開発ができるような所を見立てて、佐賀藩の為になるように事業を行なべきです」と申し上げたところ、勝茂公も同意されその通りです。領内の事業のことは兵庫に任せますと申されたので、茂安は早々に事業を開始し、新田を開発し、水害、旱害が起こらないように水の流れを見て、水の分配を定め、堤を築いて水を蓄え、末代まで変わらない塗を始めた。他に例の無い才智であると多くの人が感じた。

水利事業を言い出した茂安！ 全面的に茂安に任せた殿様(勝茂) 息もぴったり！

米歐回覧実記のあの久米邦武も、偉人大隈重信も茂安を讀んでいる  
水の神だ！

関原の師已み還りて曰く「乱已(すでに)に定まりぬ 富国の道 専ら講ずべきなり」  
成富君水功之碑 久米邦武撰文

「成富兵庫が水利土木の工を起こし、利用厚生の議を建ても、実に此の窮迫困難せる藩政を救済せんが為に外ならず」  
(眞田新蔵著「偉人成富兵庫」)…  
序文 大隈重信)



のことを勉強しようと出かけていったときの記録書記官だった歴史学者として有名な久米邦武です。彼は成富兵庫茂安に関わる関連資料を読み解いて、水功の碑の3面にわたってびつりと漢文で兵庫の治績について非常に名文で書き記しました。「関ヶ原の戦いが終わったので、これからは人を敵とせずに、干魃・洪水などの自然の敵をどのように治めるかに力を注ぎ、国を富ませるべきである」と勝茂公に提案します。成富家の姓自体が「富と成す」ですから、佐賀藩領内を富ませる事業をやっていくことを目的に兵庫の治水利水事業は始まります。

既に話されたように加藤清正が亡くなったのが1611年ですから、成富兵庫が佐賀藩で治水利水事業を手掛け、石井樋をはじめとする事業が完成していくのは1615年以降ですので、清正が亡くなつてからと云うことになります。成富兵庫は清正の治績を学ぶことができる立

場にいたことになります。

成富兵庫の利水施設として今回 5 つほど紹介しようと思っています。兵庫の事業と言われているのは県内に 100ヶ所以上あると言われていますが、成富兵庫自身がやったと捉えるのではなく、侍だけでなく大工や左官、石工の棟梁達を束ねていたと考えれば良いと思います。それら棟梁達に肥後で行われている治水を見に行かせたのは当然のことだと思います。それぞれの地域にあったやり方で、佐賀の代表的な川、



嘉瀬川と城原川から水を引くだけでなく、その水を必要としている地域、川から離れた地域の人々に水を配るシステムを作っています。筑後川沿いでは 1 年に 10m ずつ平野が広がっていましたと言われていますので、それらのところでは水が足りません。このような成富兵庫の思想は戦後まで続いて、成富兵庫の時代にはできなかった北山ダムや嘉瀬川ダムを設けて、より広い範囲に水を配っていきます。それを手掛けた最初が成富兵庫であると考えれば良いと思います。

これは既にご紹介のあった清正の主な治水議業ですが、清正は熊本の主要な河川、菊池川・白川・緑川・球磨川と格闘してたくさんの施設を作っています。彼の下には有能な大木土佐（兼能）があり、佐々成政から引き継いだ技術を用いて治水事業を行っています。これまでに説明がありましたので、これらの事業について説明することは控えさせて戴きます。

これら治水利水の原点となっているのは、揚子江支流の岷江に設けられた著名な「都江堰（とこうえん）」です。都江堰は紀元前 250 年、吉野ヶ里的遙か以前に造られ、今なお取水施設として使われています。都江堰では六字訣（けつ）「深淘灘、低作堰」（灘を深く淘い、堰を低く作る）が有名です。

「中心は深く掘って、堰は低く作りなさい」という意味でしょう。当然、堰を高く作れば作るほど水の勢いが強

### 都江堰 (B.C250) ; 李冰 (りひょう)

中国揚子江支流 岷江



くなりますのでそれをいかに和らげるのかを考えなければなりません。この 3 文字 2 つを合

わせた 6 つの文字は李冰（りひょう）の治水・利水の奥義と言われていますが、さらに 8 つの 3 文字が続きます。「乗勢利導」（勢いに乗って有利に導き）、「因地制宜」（地にもとづいて宜しくはからう）。このような水の哲学を治水に「三字経」と呼びますが、これらが都江堰にきちんと示されています。これらは仏教のお経と同じように中国から日本に伝えられたのではないかと考えられます。

### 清正・兵庫「治水と利水は一体」

成富兵庫はそれに基づいてどのような智（水土のち、知恵の智、土地の地、治政の治）でもって佐賀を設計していったのかを考えてみましょう。一番大事なのは、智：

「治水と利水は一体として処理しましょう」と言っています。地：「洪水は土地ごとに処理する」他の土地に任せずそれぞれの土地で処理しようという考え方です。地：「川の特性に応じた処理をする」熊本の川は熊本の川、佐賀の川は佐賀の

川として考える。川の特徴が十分に分かった上で知恵を施していく。特に佐賀の場合は有明海という大きな干潮満潮を有する海に接していることが重要です。また、佐賀の山はそれ程高くはないのですが、花崗岩が風化したマサ土をどう処理するかが難題です。山や平野などの地形をよく考えなければなりません。成富兵庫以前は、山から出てきた川はいわばほつたらかしです。手を付けられなかったのです。山から下りてくる「走り去る水」をいかにゆっくり「歩かせる」かの工夫、仕掛けを施しています。さらに、治：「租税を組み合わせ」て、民に不平不満が生じないような水管理を行っています。そして、色々なパーツ（水処理の装置）を組み合せて総合的な治水・利水を行っています。

そのような智・地・治による治め方、それに社会システムをきちんと重ねるやり方が成富兵庫の全体像だと思っています。佐賀の水利慣行を詳しく調べて

**成富兵庫茂安 氷土のち 智恵 土地 治政**

◎中国揚子江支流 岷江 都江堰 B.C250) 李冰 (ひょう)  
【深淘灘】 【低作堰】 【乘勢利導】 【因地制宜】  
⇒ 中心を深く作り 壁を低く作る 勢いの乗って有利に導き 地にもとづいて宜しくはからう

- 智 治水と利水の一体的処理
- 地 洪水は土地ごとに処理 分散の思想。（ほかの土地に持つて行かない）
- 地 川の特性に応じた処理 長きな干溝、土砂の処理、地形の読み
- 智 ゆっくり水を流す 走り去る水 ⇒ 歩いていかせる水
- 治 地域管理との一体化 水管理の仕組み、租税
- 智 巧みな水処理の装置 水防林、野越し 残し 乗り越し、井樋 堤）、草堰、淡水 あお）、樋門、遊水地 洪水防御と土地の肥沃化）、横堤、霞堤、片側堤 用水路）、堤防、水受堤、二線堤、伏せ越し、分流施設 象の鼻）、放水路、蛇行、溜池、クリーク、荒籠）
- 治 装置を組み合わせ、システムとして機能させる

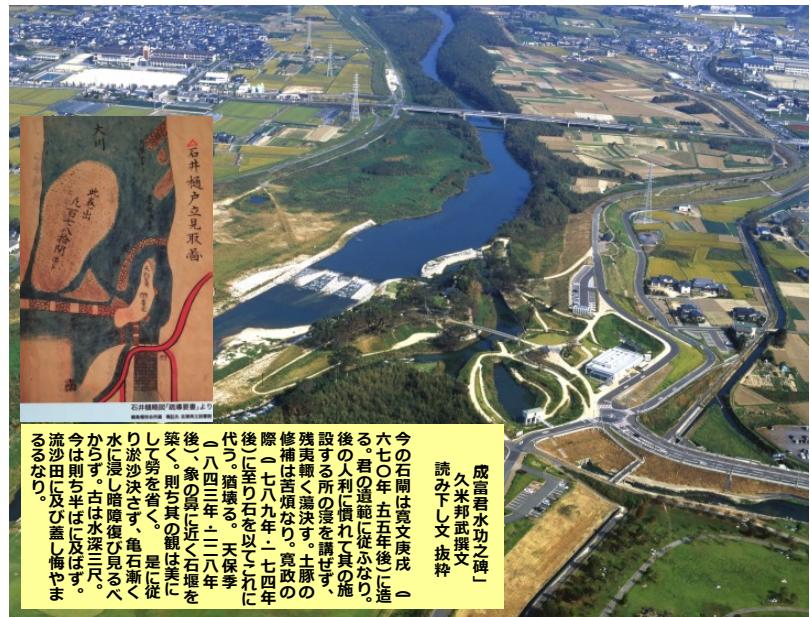
水利事業⇒治水と利水が一体化された技術 宮地米蔵 元福岡大学教授  
ミツカン水の文化センター2009.07 氷の文化】32号所収／島谷幸宏 『治水家の統 すべ』より、服部加筆 氷土のち、都江堰）



こられた宮地米蔵さんは「治水と利水はそもそも一体化された技術だ」と認識することが一番重要だと言われています。

これは、先ほども説明があった石井樋の仕掛けです。山から下りてきた川の水を、川の幅を思い切り拡げて散らします。川には二重の堤防をつくり、堤防と堤防の間には竹林を設け、内堤の付け根には荒籠をおいて流れを制御します。水がゆっくりになると、砂がこの一帯に溜まります。その砂を寄せると同時に、重要な施設である象の鼻に直接水が当たらないように荒籠で水を弾いてやる。砂は本流を下らせて、緩やかな流れで佐賀城下に水を届ける仕掛けになっています。さが水ものがたり館に来て戴ければアニメーションで見ることができます。

また、象の鼻の根元に野越を設けて、水位が上昇してくると象の鼻の先端から回ってくる水には砂が多く含まれているので、野越からの水で押し返そうとしています。このことは石井樋復元の時に島谷先生たちが模型実験で確認されています。その様な知恵を結集し、石井樋施設群として治水と利水を旨く処理しています。作ったままの石井樋は当然残っていなくて、何度も



改修を重ねています。石井樋ができるて 50 年くらい経って改修が行われています。その改修されたものがそのままの形として残っていました。後のは、成富兵庫のシステムを守ったかというと、必ずしもそうではないことが水功の碑の文章に示してあります。段々維持が面倒になってきました。実は兵庫の大井手堰は石造ではなく、杭を打ち込んで、間に土俵を置いて水を貯める仕掛けでした。砂を下流に流れやすくするための兵庫の知恵でした。それを後の人達が、流されるのが面倒になったのでしょうか、石組みに替えていました。石組みに替えることによって後々非常に苦労をしています。1834 年の疏導要書には「砂が溢れて水田にまで砂が流出している」ことが記されており、水功の碑には「悔やまれます」とまで書かれています。今後、石井樋を継承する我々もよく考えていかなければならないと思いますが、なかなか「言うや易し」で、復元に際して木製で復元するかとなると、そうもいきません。我々は、このようなことを知った上で色々考えていくことが必要かなと思います。

これもまた有名な蛤水道です。蛤水道は佐賀藩と福岡藩の藩境に設けられており、ここまでが佐賀藩領で、自分の藩に降った水を佐賀藩領の田手川周辺の水不足を解消するために蛤水道を設けて水を取り込んでいます。あくまで佐賀藩領に降った雨だけを引いているのです。水を取るための堰を、高さを決めて設け、余りの水は福岡藩に流します。福岡藩と佐賀藩は朝鮮の役の時の戦友同士れます。野越という言葉には、「治し」ながら、それ以上の必要としない水については「乗り越させる」「野越す」という2つの意味を持たせ、それを機能させるために水の口を絞り、水を溢れさせる。山の斜面が崩れないように石張りを施しています。これだけのことをきちんとやっていますが、このため池は既に埋まってしまって、自然に任せたままです。蛤水道の下流部に福岡市の五ヶ山ダムができていますので、今後この溜池をどのようにするかを考えるきっかけになったら良いかなと思います。宮地米蔵先生は、野越は佐賀平野の道路、畦一本一本全てにその機能が備わっていることを知つておかなければいけないと、言われています。

これは、佐賀平野ではなく松

## 利水の技③

### 桃の川の馬の頭

松浦川上流部 萩ノ尾堰

ふせこし

+ 伏越(逆サイフォン)  
川の水面より高い場所に水を引く

1

2

3

4

伏越(逆サイフォン)で田んぼに水をひく  
1611(寛永16年) 伊方村松浦町

萩ノ尾堰 24%

伏越 22%

上原地区 54%

木でつくったパイプ「馬の頭」

木とコンクリートでもプラスチックもありましたが、水を過す  
パイプは、木でつくっただけの  
ような雰囲気をいたしました。  
その後、パイプはコンクリート  
でぐり直され、桃の川の水路  
はいつも活やかしています。

4

3

わきあがる  
少し低い  
左岸  
右岸  
少し高い  
上流

大がわきあがるところ

水をすいごとこう  
萩の川の馬の頭

**利水の技④ 三千石堰**

城原川から佐賀側に農業用水を送る

三千石堰 + 横落水路

野越しは左岸側に多い  
左岸側7カ所 右岸側2カ所

佐賀城下町優先の思想?  
左岸側にはすぐ田手川

・堰上流 水位上昇による洪水の危険が高まる

・堰下流 横引きによる用水不足 干ばつが問題となる

・横引き・上・下流監視のもとに毎年堰を作り直す

三千石堰

堰を利用して水をひく  
年代不明 神埼市

かつて城原川の西側の地域はいつも水不足に悩まされていました。そこで、城原川に堰を造って取水し、西に向かって真横に造られた水路(横落水路)を通って多くの地域に流れるようにしました。

この堰や堤防を洪水から守るための象の鼻や、流れを弱め土砂を沈めるための天狗の鼻が設けられています。

浦川で成富兵庫が行った事業です。現在の言葉で言えばサイフォンという技術で、川の底をくぐって、川の水面より高い水の得にくいところに水を送るシステムを作っています。

これは石井樋とよく似た構造と言われていますが、城原川に設けた水システムで、水の対立が起こらないように三千石堰を設けて、横引きのための水路を新たに作って水を送っています。ここでの作業は全て地元の人達で行われています。堰を頑丈に作ってしまうと上流ですぐに水が溢れて上流が困りますし、また頑丈で高い堰を作られると下流に必要な水が下ってこなくなりそれも困ります。毎年堰の突き直しをやるのですが、上流の人と下流の人が堤防の上で監視しながら、水を受け取る側の人達が行う作業を見守っています。その様な形が現在も続いている。

永池の堤は、佐賀・白石平野がどんどん拡大する中で水が足りなくなりますので、新たにため池を設けて水を送るための仕掛けです。

### 「新しく生まれた美しさ」と「失われた大切なもの」

時間がなくなりましたので個別の話しあは省略しますが、最後に加藤清正に従った大木土佐の「治水五則」を示します。これに基づいて熊本に於ける様々な仕掛けが作られています。黒田如水の「水五訓」とはまた違う川の実際的、技術的な「五則」にしたがつて作られています。熊本に於けるヨナの処理の仕方、治水で水を落ち着かせたから水を使っていくといったことがそれぞれの川でやられています。また、ため池に余り土砂が溜まらない工夫を清正は先駆けてやっています。成富兵庫茂安と加藤清正の利水の技の類似点と相違点については既に説明されています。

これから温故知新というのが一番重要になるのですが、柳田国男の遺言に「何が新しく生まれた美しさで、何が失われた大切なものが、それを常に考えておこう」というのがあります。



### 大木土佐（兼能）1552～1611 佐々成政（1535～1588）の重臣 治水五則

- 一、水の流れを調べるとき、水面だけでなく底を流れる水がどうなっているか、とくに水の激しく当たる場所を入念に調べよ。
- 一、堤を築くとき、川に近いところに筑いてはいけない。どんなに大きな堤を築いても堤が切れて川下の人々が迷惑する。
- 一、川の塘や、新地の岸などに、外だけ大石を積み、中は小石ばかりという工事をすれば風波の際には必ず破れる。角石に深く心を注ぎ、どんな底部でも手を抜くな。
- 一、遊水の用意なく、川の水を速く流すことばかり考えると、水はあふれて大災害を被る。また川幅も定めるときには、潮の干満、風向きなどもよく調べよ。
- 一、普請の際には、川守りや年寄りの意見をよく聞け。若い者の意見は優れた着想のようにみえてもよく検討してからでなければ採用してはならぬ。

す。同じ民俗学の宮本常一さんも同じ言葉を遺されています。

石井樋の上流の與止日女神社にある満珠と干珠です。これは治水と利水を象徴する 2 つの珠で、これをきちんと使い分けてそれぞれの地域に合った技術を使っていくことを示しています。この神社には副島種臣さんが、「佐賀の守り所」ということで水功の碑の題字と同じように、扁額を寄贈しています。

ほとんど成富兵庫茂安の説明だけをさせて戴きましたが、前の方から清正の事例紹介がありましたので、このような説明になりました。どうもご清聴有り難うございました。

◎ 何が新しく生まれた美しさで 何が失われた大切な物  
それをいつも考えること -柳田國男の遺言-

◎古いものがどのようにして姿をけすか、そのあと何によっておきかえられていくか、ふるいものが残るすれば、それはどういう形で、どんなに残り、現代社会にどんな意味を持ち、役割を果たしているであろうかということということを追求しなければならない -宮本常一あるいてきた道-

副島種臣書「火國鎮守」

ご清聴頂きありがとうございました

與止日女神社の宝物  
潮満珠と潮干珠  
利水・治水を自在に制御

## 講演5 高瀬哲郎氏（石垣技術研究機構代表）

### 「城郭石垣技術はどのように広まったか—兵庫の師匠は清正か—」

今日は、高瀬です。荒牧先生の紹介にありましたように、実は私自身今日ここに立てるかどうか不安でした。皆さんを混乱に陥れましたが、何とかここに立つことができました。お話をさせて戴きます。

私がこの話を戴いたとき、ある方から「成富兵庫が石井樋などで石垣を使っていましたが、その師匠は誰でしょう。成富兵庫自身が持っていた技術なのか」と尋ねられたときに、即座に「加藤清正、清正公（せいしょこ）さんですよ」と一言で片付けましたら、「そんなに一言で言わなくても」「もう少し成富兵庫を立てて貰いたいな」と言われました。その様なことを含めて今日は話してみたいと思います。

タイトルは「城郭石垣技術はどのように広まったか」とありますが、「成富兵庫の師は加藤清正だ」というと大変怒られますが、地元熊本では「清正公（せいしょこ）さん」と親しみを込めて呼んでいます。その二人の関係も含めて話をさせて戴きます。

#### 石垣技術の歴史と展開

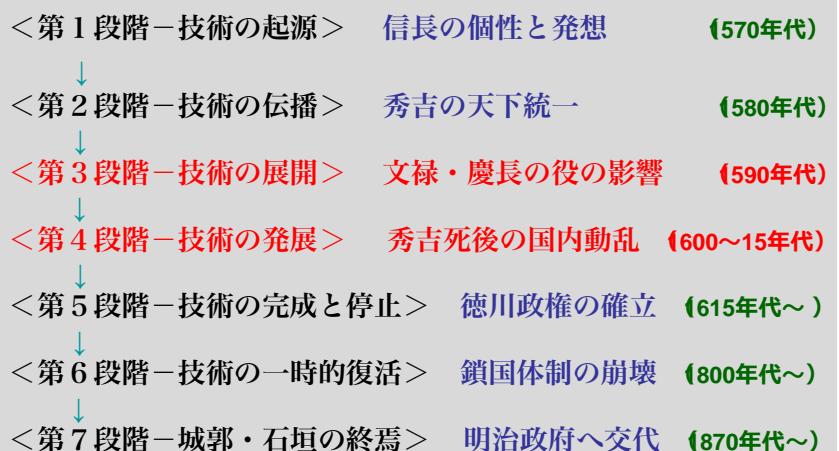
先ず「日本に於ける石垣の歴史と展開」はどうになっているかを考えます。石垣技術は二千年、三千年前からあったわけではありません。日本に於ける城郭石垣、高石垣はある時期から始まっています。中世から戦国時代、龍造寺隆信、大友宗麟、南の島津が戦っていましたが、高石垣といえるものは全くありません。勿論佐賀平野にもありません。その頃、一番高度な積み方を使った石積にはどのようなものがあったかというと、佐賀平野にはありません。あるとするとどこかというと三瀬の山の中に三瀬城があります。高さはせいぜい1m位です。今佐賀城にある4m、5mというようなものではありません。もう一つは、鳥栖の方にある勝尾城です。高く積む技術は持っていないので、2m程度を段積みしています。それでもこれは九州では高度な技術の方です。



このような石垣技術に変革をもたらすのは織田信長です。織田信長が安土城を築くときに「高石垣でつくる」ことを発案しまして、それに応えたのが「穴太衆（あのうしゅう）」と呼ばれる集団です。その両者が相まって日本で初めての高石垣ができあがります。ですから日本での発生源は勿論「畿内」です。では周辺諸国の影響をうけたかというと、勿論受けていません。周辺諸国を見てみると、左下の写真は琉球王朝の勝連城（かつれんぐすく・かつれんじょう）です。右下の写真は朝鮮半島の鶴足山（けじょくさん）城です。日本の石垣とは全く違います。どこが違うかというと周辺諸国のはカーブを持つ石垣を築いています。そしてほぼ垂直に積み上げています。それに対して信長が作ったものは角をしっかり作ります。そして斜めに積むのも一つの特徴です。

このように始まった石垣技術がどのようにして日本中に広まつたかということを考えます。時期を分けると第1段階から第7段階まであります。これを詳しく話しますと日が暮れてしましますので、今日は行いません。先ず発生源は「信長の個性と発想」あります。次に秀吉の天下統一に伴って技術が水平に広がっていきます。最後に明治維新を迎えて終わりになりますが、今回の話しの流れで成富兵庫と関係するのは「第3段階-技術の展開-文禄・慶長の役の影響」として「第4段階-技術の発展-」の2つの段階です。この2つの段階に焦点を当てて話していきます。一つ憶えておいて戴きたいのは、この変遷の中で技術は次々に変わりますが、その変わり目は大体10年程度です。10年単位で技術は次々と変わって参ります。

### 日本に於ける石垣技術の変遷



#### < 反り > 日本独特の技術的発展

1593年 → 1600年代 → 1610年代 → 1620年代



直線的な石垣  
反りの発生  
反りは無い

#### < 出角部 > 伝統的技術と、その変遷

1592年 → 1611年 → 1620年代 → 1864年

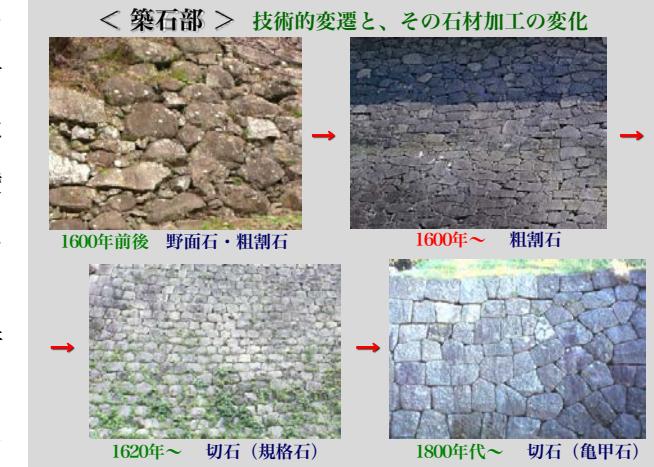


日本伝統の高石垣に依る築城法  
洋式築城法 導入

例えば「出角（ですみ）部」の技術的変遷を見ていきますと、九州に入ってきて最初は肥前名護屋城で、次々に展開していきます。これは佐賀城、これは久留米篠山城です。最後は五稜郭です。1592年から1620年くらいまでの間に次々と変化していきます。どのような変化かというと、石を加工する、規格化するという技術変化が、わずか30年くらいの間に次々と起こっています。次に「反り（そり）」の観点から見てみます。1600年代に入って初めて反りが出てきます。そして1610年代になると規格化が進んで反りが曖昧になるという変化が起こります。次は「石の面」を見てみます。最初は自然の石、割った石、規格化された石、それから多角形へと変化します。この変化を見てみると1600年から2~30年の間に日本の石垣の技術が遙かに高度な技術に変化しているといえます。

#### 成富兵庫茂安はいかにして高石垣の技術を会得したか

じゃあ、「成富兵庫茂安はいかにして高石垣の技術を会得したのか」に焦点を当ててみたいと思います。高石垣の技術は、成富兵庫茂安に限らず周辺諸国も含めて誰も持っていない技術です。その技術を成富兵庫は如何に会得していったかを考えるために、一つの年表を見てみます。兵庫は1560年に生まれます。龍造寺・鍋島に仕えますが、1587年に秀吉が九州平定に入ります。それ以降、成富兵庫はあち



成富兵庫茂安に依る石垣と水利施設		年号	西暦	足跡
		永禄 3年	1560	佐賀郡押田（現、佐賀市鍋島町）に生まれる。
		元亀元年	1570	龍造寺氏に仕える。
		天正 8年	1580	鍋島氏に仕える。
		天正 15年	1587	豊臣秀吉の九州平定に参加。
		天正 19年	1591	名護屋城の築城始まる。数ヶ月で完成。 鍋島直茂、蓮池城天守を豊臣秀吉（名護屋城）へ献上。
		文禄元年	1592	文禄の役に参加。
		文禄 2年	1593	鍋島直茂・勝茂、竹島倭城（釜山広域市）を築城
		慶長 2年	1597	鍋島直茂・勝茂、馬山倭城（馬山市）を築城 江戸城普請、大坂城普請に参加。
		慶長 16年	1611	佐嘉城、竣工。
		元和年間	1615 ~23	嘉瀬川石井樋を造る。
		"	"	背振山に蛇水道を造る。
		"	"	筑後川千栗土居を造る。
		年代不詳？		松浦川馬ノ頭・萩尾堰を造る。
		年代不詳？		城原川三千石堰を造る。
		寛永 11年	1634	筑前那珂寺にて、死去。

こちに盛んに活躍の場を拡げます。一つは肥前名護屋城の築城が始まります。鍋島も勿論参加しています。直茂は蓮池城の天守を寄進しています。そして、文禄の役・慶長の役に参加しますが、鍋島直茂軍は朝鮮半島に渡ったところで竹島倭城（ちくとうわじょう）、馬山（まさん）倭城を造ります。帰ってきてからは江戸城普請、佐賀城から石井樋などの水利事業に入っていきます。1615年を境に以前は城造り、以後は水利事業と言うことになります。1615年以降は城造りはほとんどできなかったのです。

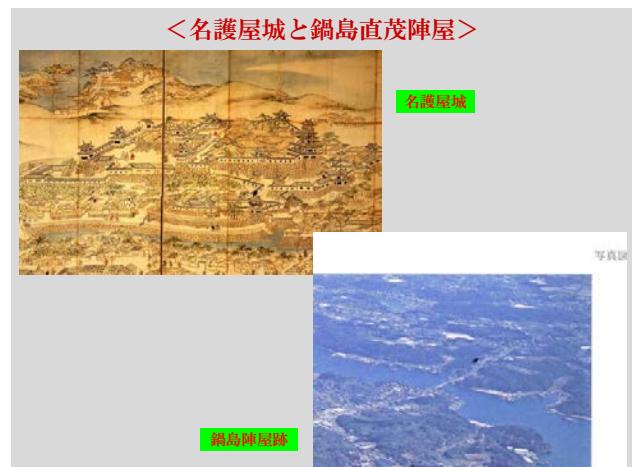
朝鮮半島で本格的な城造りを行っていますが、もう一つ次のようなことも憶えておいて戴きたいと思います。それは佐賀城が1611年に完成していることです。先ほどから話しことにあります石井樋は佐賀城下の上下水道のために造られたのですが、その完成が1615年だとすると城ができる

た頃には石井樋はできていなかったのかと言うのが一つ課題になります。そのことについては後ほど話してみたいと思います。

鍋島軍が最初に関わったのが肥前名護屋城の築城です。名護屋城のすぐ近くに鍋島軍の陣屋跡が残っていますが、結構大規模な石積です。次第に技術を習得していったのではないかと考えられます。本格的になるのは国内ではなく朝鮮半島に渡ってからで、鍋島軍が造った城がこのような高い石垣で造られているのです。それも石積といったものではなくて本格的な高石垣の技術なのです。

半島には倭城と呼ばれている本格的な高石垣の城が30くらいあります。ここには先進的な技術を持った小西行長、加藤清正、黒田如水と言った豊臣軍がいますが、それまで技術を有していない大名達と一緒にいて城造りに参加していることが重要なことです。

この図には文禄の役と慶長の役で造った城を示しています。ここが竹島倭城で文禄の役の時に造ったお城、これが馬山倭城で慶長の役の時に造ったお城です。清正公がつくった御城はこの熊川



(うんちゅん) 倭城で、これが小西行長が造った順天 (すんちゅん) 倭城です。重要なのは、城を造るとき、進軍していくときに誰と一緒にいたかです。鍋島家に残る記録を見ると、鍋島家が進軍していくときの記録に咸興 (かんこう) という都市名で出ています。ちょっと離れていますが永興 (えいこう) という名前も出ています。こういう地名のところを動いていることが分かっています。この都市がどこにあるかというとかなり北の方です。北に進軍する軍の中で、赤い線

で書いたものが二番隊の清正軍が動いた行程です。その清正軍に鍋島軍も一緒に動いていることが記録から分かります。つまり鍋島軍に一番関係しているのは清正軍です。その中で先進的技術を持っている清正公さんのやり方をよく見ていました。また朝鮮半島は中国の影響を強く受けているので高度な水利技術を見た可能性もあります。そこが一つ注意しなければならない点だと思います。例えば竹島倭城はこれまでのものとは全く違います。

皆様があちこちで見られる本格的な高石垣です。技、技術のありようがかなりしっかりしたものですね。単なる石積のものではありません。ここで鍋島家も成富兵庫茂安も技術的には高みに到達していると言うことは間違いません。これを誰に教わったかというと、それは清正公さんだといえます。

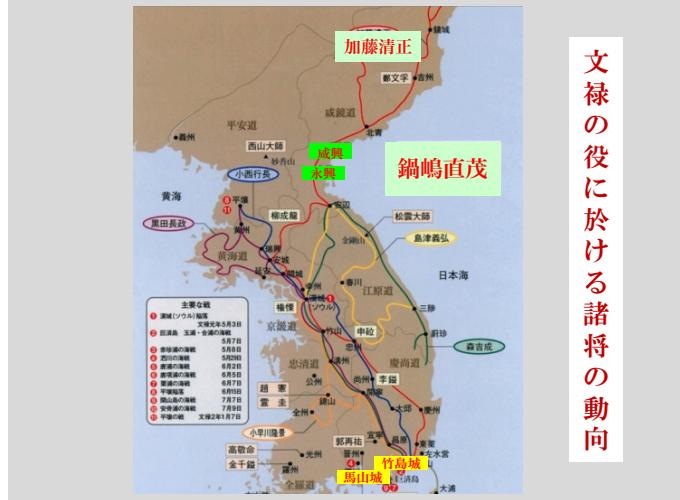
### 高石垣技術の絶頂期

更に重要なのは、日本全国に関わることですが、その戦いの最中、慶長3年（1598年）8月18日に豊臣秀吉が亡くなり、全軍が帰国します。そして日本は再び戦乱状態に陥ります。つまり次の天下人が誰になるかが最重要課題になります。そうなりますと各地の大名は「自分の国は自分で守る」しかないことになり、1600年に関ヶ原の戦いが起こります。つぎに1603年に江戸幕府が開かれます。それでも対立は激化します。まだ誰が統一するかが分かりませんので、諸大名は自分の国の防衛体制を取っていきます。その時に石垣の構築技術は最高潮に達します。先ほど「1610年代に最高潮に達します」と申し上げたのはこのことを差します。

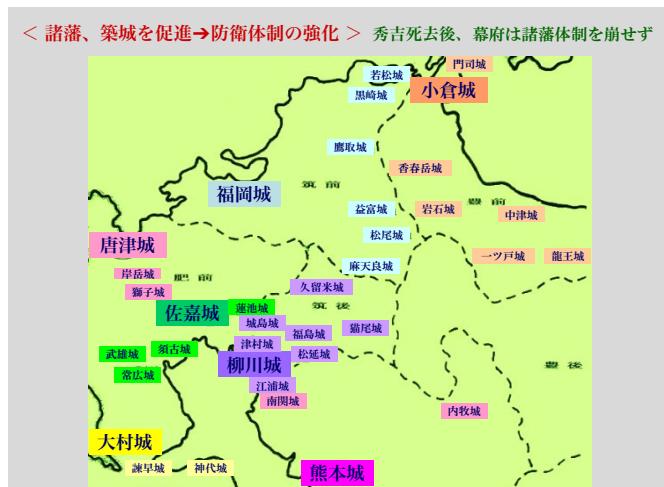
特に九州が顕著ですが、例えば福岡藩では、本城、福岡城を中心にして国境に改めて城を再構築します。肥後も熊本城を中心にして国境に城を再構築します。佐賀も同じように蓮池城、武雄城を造りますし、新たに入ってきた細川氏も小倉城を中心に国境に本格的な石垣の城を築いていきます。つまり、敵対関係がすごく明らかです。高石垣の技術が最高潮に達しているというのは間違いません。

### 一国一城の時代へ

その当時の技術の発展を見てみると、1600年代と1610年代で少し様子が変わります。これ



文禄の役に於ける諸将の動向

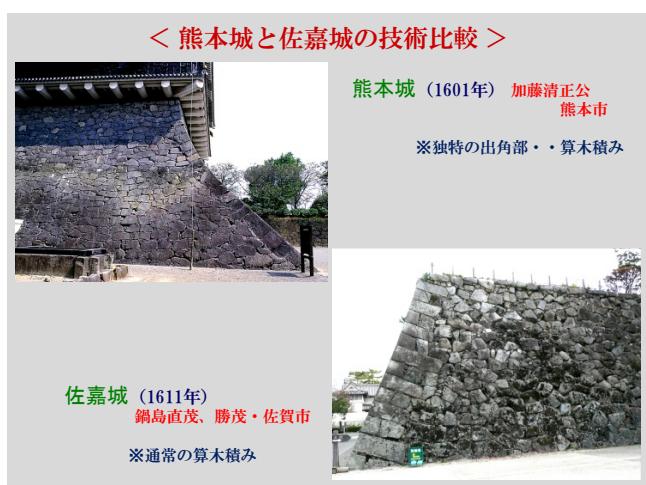
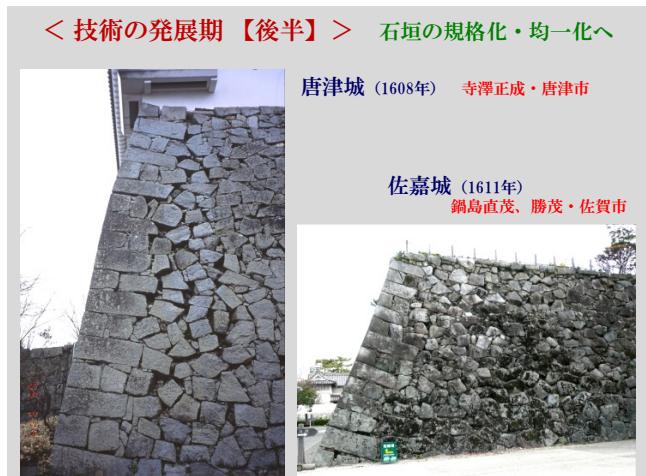


は熊本城ですが、反りが導入されます。これが有名な「武者返し」という技術です。これは小倉城ですが、どちらかというと保守的あまり反りが入っていません。

後半期、1610年代に造られたものを見てみます。佐賀城は熊本城よりかなり遅れて1611年に完成しています。そして唐津城も遅れて造られます。先ほど「清正公さんから技術的な修得を行った」と申し上げましたが、「佐賀城には熊本城の武者返しがなぜないのか」という疑問が湧きます。「清正公さんから教えて貰ったのなら、武者返しを使っていないのか。使って良いのじゃないか」という謎が起こりそうです。熊本城で見られる反りが佐賀城では見られなくて、普通の当たり前の1610年代の石垣なのです。

そのことを考えるためには地元の熊本藩のことを考えなければならないと思います。熊本藩は本城を中心に周辺に7支城体制を取っていますが、1611年に清正公さんが亡くなった途端に幕府は支城の破却を命じます。他の藩には1615年に「一国一城」を出したのに、熊本藩には4年前にいち早く支城の破却を命じているのです。今まで熊本藩には手出しができなかつたのに、清正公さんが1611年に亡くなった途端に手を出します。清勝公さんが持っていた技術は停止するのです。そして2代目忠広の代にはその技術は伝わっていないのです。その様にして武者返しの技術はなくなってしまいます。

もう一つ重要なのが、肥後国内に南関城がありますが、この南関城でも武者返しの技術を使った可能性が高いと思います。今調査をしていて、そのことがようやく分かってきました。他のところでも使った形跡が出てきていますが、それから考えますと武者返しの技術は国外流出できない技、清正だけが持っている技で、國の外には出していなうようです。その様に考えると、武者返しが佐賀城で使われていないことも理解できます。





**<熊本藩に於ける城の破却>**

**・慶長十七年 六月二七日付 幕府下知状**  
「水俣・宇土・矢部 三ヶ所之城、可為破却、然者、水俣・宇土有之諸侍妻子共、熊本引越尤候事…」

**・元和元年 六月十三日付 一国一城令**  
「南関城・佐敷城・内牧城の破却と麦島城の存置」

**・寛永十五年 六月七日付 松平伊豆守信綱宛 細川忠利書状**  
「…我等国内之石垣之有所ハ無御座候て、然共佐敷・みな保と申両所、古肥後守時城御座候を割申候つる、塙も埋申石垣は勿論崩候へども、端々ニ石之見へ申候所少ハ御座候不入所にて御座候へども、それも石をのけさせ申候…」

※ 元和五年の八代大地震で麦島城崩壊)  
→元和八年、松江(八代)城の即時再建

### 佐賀城の築城が遅れた理由

では、「なぜ佐賀城の築城は九州の他の城に比べて遅れたのか」を考えてみましょう。今の佐賀城ができる前の慶長期の絵図があるのですが、そこには「龍造寺城」と書かれています。こちらは蓮池城です。龍造寺城と書かれている歴史を見ますと、龍造寺氏がまだこの旧佐賀城にいて城主だったのです。龍造寺隆信は天正年間に村中城（龍造寺城）を整備します。鍋島直茂は、龍造寺政家、高房が



### 龍造寺城から佐嘉城への転換とは

- 天正年間 …… 龍造寺隆信、龍造寺（村中）城を整備か?  
1584年3月 隆信、島原・沖田畷の戦いで、隆信が戦死
  - 1589年1月 …… 直茂、蓮池城から龍造寺城二之丸へ移る  
1591年10月 …… 直茂、蓮池城天守を名護屋城へ献上  
1592~98年 文禄・慶長の役→直茂・勝茂・朝鮮半島出兵
  - 1600年2月 …… 勝茂、龍造寺城・蓮池城の普請着手  
1600年9月 関ヶ原の合戦 西軍の鍋島氏、後、徳川方へ
  - 1601年2月 …… 勝茂、蓮池城天守の雨漏り修理を命じる  
1603年3月 徳川家康、江戸に幕府を開く
  - 1607年9~10月 …… 龍造寺政家（隆信の子）・高房（隆信の孫）、死去
- 28

### 鍋島氏、佐嘉城の築城を為し得ず！

- 1584年3月 …… 龍造寺隆信、島原沖田畷で戦死  
1600年9月 関ヶ原の合戦 西軍の鍋島氏、敗退
  - 1601~08年 …… 熊本城・福岡城・小倉城・柳川城など、築城  
1603年3月 徳川家康、江戸に幕府を開く
  - 1607年9~10月 …… 龍造寺政家・高房父子、死去
  - 1607年11月 …… 佐嘉城天守瓦を焼き始める  
1608年6月 …… 佐嘉城築城を本格的に開始  
1609年1~11月 …… 佐嘉城天守構築 全国25箇所でも天守構築中  
1611年6月 …… 勝茂、佐嘉城本丸へ入城  
1610~12年 尾張名古屋城の手伝い普請  
1611年6月 加藤清正、死去  
1615年5月 大坂の陣→豊臣家滅亡
  - 1615年6~7月 一国一城令・武家諸法度  
→勝手な新規築城・修理の停止
- 29

亡くなった後にしか佐賀城には入れていません。それまでは蓮池城を中心に整備を進めていたわけです。龍造寺隆信が1584年に亡くなり、1600年代になって熊本城、福岡城、小倉城などの名だたる城はこの時期にできあがっていますが、佐賀城を手掛けることができなかったのです。まだ主（あるじ）がいたのです。1607年に龍造寺政家・高房親子が亡くなって、やっと本格的に築

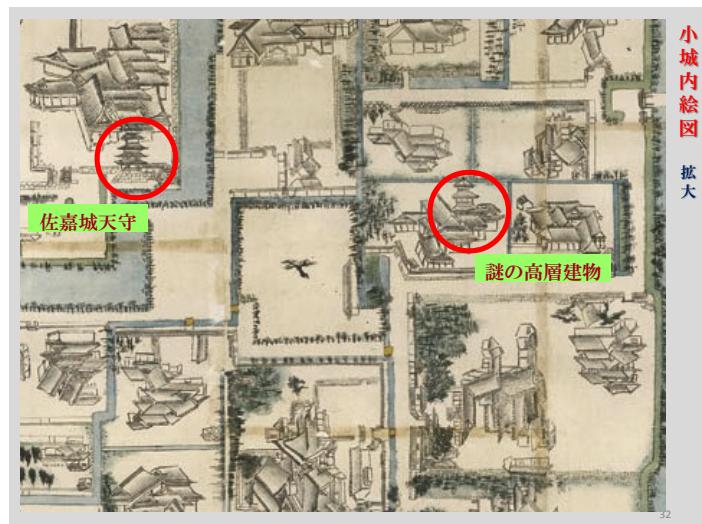
城できたと言うことです。そこでやっと佐賀城という言葉が出て参ります。そこでは高石垣の技術が使われます。佐賀城築城が遅れたのはその様な事情からだと思います。

佐賀城は、本丸、二の丸、三の丸とこのような配置になっています。龍造寺城はここを本丸にしています。今の佐賀西高校の当たりです。ひとつ気をつけたいことがあります。慶長年間の絵図にはここに天守があります。ここには村中城の痕跡がまだ残っていることが考えられます。この絵図には佐賀城の天守がありますが、もう一つ離れたところに4層5層の高層建築があるのです。これは何なのでしょう。このことは佐賀市の人々に教えて貰ったのですが、それまでは全く気がつきませんでした。まだ村中城の痕跡が残っていることだと思います。この絵図からするとこの二つの天守は同じような高さがあります。龍造寺との関係を考えていかないと、鍋島がいつ頃高石垣を築いていったかを考えることが難しいと思います。早く解明しなければならないと思います。

成富兵庫茂安と加藤清正の経歴を並べてみると、清正是1587年の九州平定に参陣し、九州に入っています。朝鮮の役で石垣造りが始まりまして、清正公さんが亡くなかった1611年に佐賀城が完成しています。

### 清正公と兵庫の水利技術

時間がなくなってきたが、清正公さんの水利技術を少し見ておきたいと思います。先ほどからお話しがありますように、誰が造ったかはなかなか分かりませんが、球磨川に次々と「刎ね」が出てきています。この調査に私も参加いた



しましたが、「小西行長かな」と聞かれましたので、私は「清正公さんだ」と答えました。萩原堤防の石積もそうです。緑川上流の鵜ノ瀬堰もそうです。12, 3 年前に永井さんという方に「石積が出ているので見に来て欲しい」と言われて出かけ、「細川の仕事か」と言わされたので、はっきりと「これは清正公さんだ」と答えました。また、鼻ぐり井手も清正公さんです。

成富兵庫茂安も荒籠、石井樋、馬の頭と言ったものを手掛けています。馬の頭は、対岸から川底を下って、こちら側に水を送る技術なのです。

### 佐賀の石工衆のこと

このようなことを考えていくときに重要なことはどのような石工衆が活躍していたかということです。よく「城造りは穴太衆だ」と申し上げる場合が多いのですが、佐賀藩の場合はどうも当初から地元の石工衆が活躍した可能性があります。今分かるだけでも塩田に塩田石工衆がいますし、小城藩には西川（さいがわ）石工衆がいます。また、多久には砥川石工衆がいます。これらの石工衆の活躍を見ていくと、それを統率した成富兵庫茂安の役割が明確になってくると思います。

最後は少し急ぎましたが、これで私の話を終わらせて戴きます。

### 肥前佐嘉の三大石工衆

#### 石造物)細工する石工衆

<塩田石工衆> — 蓮池藩 筒井氏  
(蓮池石工衆) 筒井氏

<西川石工衆> — 小城藩 武富氏・富永氏・平川氏・馬場氏

<砥川石工衆> — 多久領 平川氏  
武雄石工衆? — 武雄領 鳥屋氏

#### 石垣)構築する石工衆

<植賀石工衆> — 唐津藩 武富庄兵衛・徳永氏

#### <技術の復活→明治維新による終焉>

四郎島台場 (1853年)  
佐嘉藩の構築・長崎市



デ・レイケ導流堤 (明治23年)  
佐賀市川副・大川市

## パネルディスカッション

### 「兵庫・清正の時代の人物群像と技術の伝承」

コーディネイター 荒牧軍治（さが水ものがたり館館長）

パネリスト 富田紘一（熊本市文化財専門相談員）

金子好雄（NPO 法人白川流域リバーネットワーク代表）

富田紘次（鍋島報效会徵古館学芸員）

司会進行 竹下泰彦（NPO 法人嘉瀬川交流軸理事）

これまで 5 人の方にご講演をいただきましたが、これからはパネルディスカッションに移りたいと思います。パネルディスカッションの進行については、コーディネイターの荒牧さんにお願いいたします。荒牧さん、よろしくお願ひいたします。

コーディネイター 荒牧軍治（さが水ものがたり館館長）

長時間になりましたが、最後のパネルディスカッションに入りたいと思います。ここには 3 人の方にお座り戴きました。講師をして戴いた方にはサイドの席に控えて戴いていますので、質問等があれば意見をお聞きしたいと思います。このパネルディスカッションには、新たに 2 人の方に座って戴きました。NPO 法人白川流域リバーネットワーク代表の金子好雄さんです。熊本東海大学の川の専門家で、私たちはいつも付き合っていまして、私が金子先生に頼み事をしたり、金子先生から私が頼まれたりしています。一番向こう側に富田紘次さんに座って戴いています。基調講演をお願いした富田さんと同じ名前ですが、実は富田紘一さんの息子さんです。富田紘次さんは、鍋島報效会の学芸員なので、以前から付き合いがありまして、鍋島家のことで分からぬことがあつたら富田さんに聞いていました。今回この「成富兵庫茂安と加藤清正」シンポジウムを開催するに当たってどなたか熊本からお呼びしたいと考えていた時に、富田紘一さんの名前を知り、ご本を読ませて戴きました。誰かが「富田紘一さんはあの富田紘次さんのお父さんですよ」と教えてくれましたので、それ幸いと、彼に電話しまして「お父さんをシンポジウムに呼びたい、電話して説得して」とお願いしました。また彼は、鍋島のことは何でも知っている立場なので、「パネリストに来て」とこの席に据えてしまいました。今日は親子でこの席に座って戴きました。先ほ



ど紘一さんにお伺いしたところ「親子で出るのは初めてだと思う」と仰有っていました。今日は良い機会ができたのではないかと思います。

今日は後ろの時間が決まっていて「時間通りに終われ」と事務局から指示を受けていますので、早速始めたいと思います。金子先生と富田紘次さんには、このテーマに関して私見て構いませんのでお話しを戴きたいとお願いしました。先ず、金子先生からお願ひいたします。

### 金子好雄（NPO 法人白川流域リバーネットワーク代表）

ご紹介戴きました金子でございます。時間は 10 分と言うことで厳しいなと思いましたが、幸いなことに、今まで講演された方の内容にほとんどかぶっていまして、私が申し上げることはほとんどないなと思っております。

はじめに申し上げますが、富田先生は高名な方で、熊本では知らない方はおられないという方です。私は熊本に来て 31 年になりますが、元々東京出身で全く九州には地縁血縁がありません。31



年熊本にいる間に、色々と熊本のことに関心を持って付き合ってきましたので、そのことを話して欲しいということで、今日ここに座っているのだと思います。先ほど富田先生が「相撲の土俵からプロレスのリングに上がったようだ」と言われましたが、私は更に厳しくて「場外乱闘に近い」など、思っております。

私がこのようなことを始めたのは、実は 2013 年に亡くなられた永井勲さんにお目にかかったからです。実は、彼は私より年下ですが、私の先生です。先ほど高瀬さんが仰有っていた「岩下の堰」を見せて欲しいと訪ねて行ったときに初めてお会いして、そこからのお付き合いでした。亡くなるときにたまたま奥様からお電話を戴いて、病院に駆けつけて、私が病院にいる間に亡くなりました。その様なことで今日は非常にご縁を感じています。今日話す中身は、永井さんの影響を非常に受けています。富田先生が話された中に竹林先生の話がありましたが、永井さんが「竹林先生の話は少し言い過ぎじゃないか」と仰有っていましたが、私も「そうだな」と感じていますので、私の師匠の永井勲さんの影響だと思って、ご勘弁戴きたいと思います。

### 加藤清正の川づくりの考え方

これは全体のまとめです。お手元のものは少し見にくくなっていますので、少し拡げて見やすくしただけです。熊本には大きな一級河川が 4 つあります。北から菊池川、白川、緑川、球磨川の下流部です。私が言いたいことは、「加藤清正は 4 つの河川の治水を行うに当たって、その個性

を十二分に調べてから行ってきた」と言っています。これまでにもお話をしがありましたのでお分かりだと思いますが、その調査はかなり徹底したものだったと思います。また、治水工事は、利水工事とセットで行っています。このことは非常に特徴的です。その恩恵を今の熊本は大きく受けています。

## 加藤清正の川づくりの考え方

- 菊池川・白川・緑川・球磨川それぞれの河川の個性を十分に調べた。
- 治水工事は、田畠の灌漑を想定した利水工事と一緒に実行した。
- 流域の上流から下流までの右岸・左岸両岸を考えた「総合治水・利水的な考え方」で川づくりを行った。点や線でなく面で流域を考えた川づくり。
- 治水・利水工事にあたっては、まず第一に「川がどう流れたいか」を知るために、現地調査を徹底して行った。その結果により、基本的に川の流れに逆らわない、流れをなだめ、遊ばせる、そして堀替えや廃川によるピーク流量の緩和、背割り堤による分流など多くの工夫を行った。

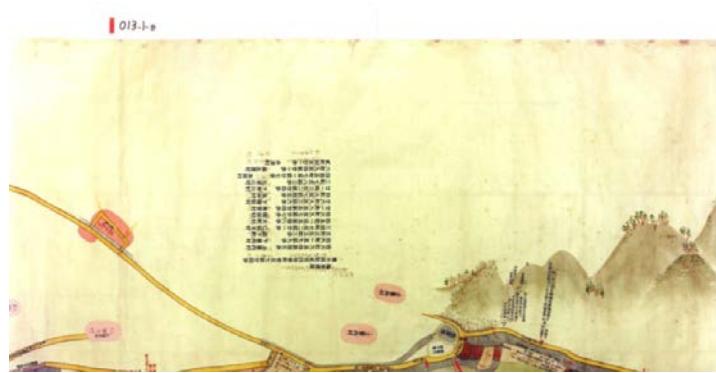
加藤清正は、最初は肥後半国を統治していて、緑川を境にして南の半国は小西行長が統治していました。関ヶ原以降に肥後一国を統治することになるのですが、球磨川の上流部は相良藩ですから別にして、3つの河川は完全に肥後一国の中にあります。川の右岸も左岸も同じ領内と言うことになります。佐賀や福岡で見られるような、対岸が他領と言うことはありません。そのことの影響は大きいと思います。河川の上流から下流まで、その両岸を考えた総合治水、総合利水ではなかったかと思います。ここでのトピックス的なことは有名ですが、よく見ていくと「点とか線ではなく、面で流域を考えた川造り」をやられています。

最後に、島谷先生もよく言われることですが、川造りをするに当たって「川はどう流れたいのか」ということを考えて治水利水を行う」ことが重要です。工事をする前に「どんな川なのか」を徹底的に調べたのです。現場を非常に大事にしています。後で出てきますが、清正は領主ですがかなり頻繁に現場に出かけています。逆に現場工事に監督の人が「もう明日は来ないだろう」と思っていると、朝一番に現場に来ていて、監督は裏口から急いで出でていって、前からいましたという顔をしたという話しが残るほど、清正は現場に頻繁に出かけています。その結果、基本的に「川の流れに逆らわない」「流れをなだめる」「遊ばせる」といったことを考えて、川の掘り換えをやったり、川を埋めたりして、ピーク流量を緩和するようにしています。「ゆっくり流す」「時間差で流す」ことをやっていますし、先ほどありました石堰のような背割堤も用いています。時間がなかったので石刻の話しありました。

### 鵜ノ瀬堰

詳しくは後で見て戴ければ良いのですが、何度も出てきている緑川の鵜ノ瀬堰です。その北で合流しているのが佐保川で、私は霞堤ではないと思っていますが、合流点近くで不連続な堤を用いています。高瀬さんのデータにもあります。

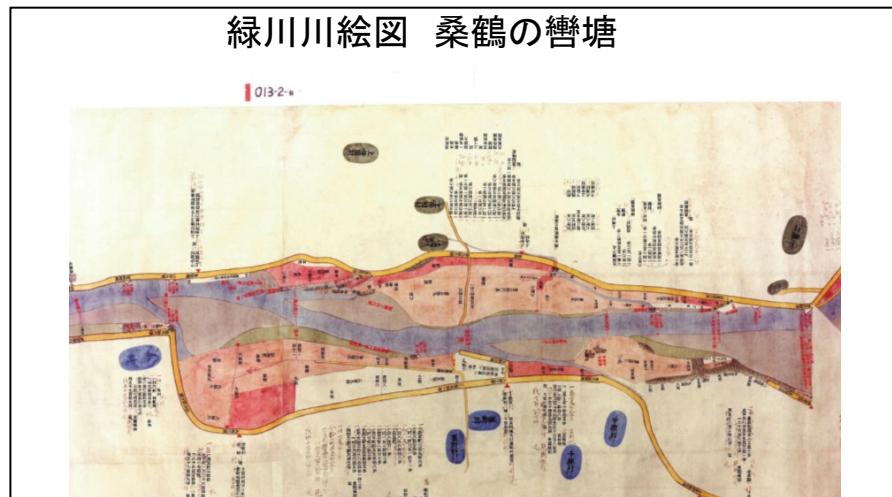
### 緑川川絵図 鵜の瀬堰・佐保川合流付近



したように、そこの石垣は見事なものです。実は、こここの調査をきっかけに環境工学をやっている私が「川にはまった」のです。そして「今は川に溺れて」います。鵜ノ瀬堰の方が元々の緑川で、その流れを変えたのでは無いかと言われています。元々佐俣川は別に流れていてそれを一本にした。佐俣川を緑川に直角に当てて緩和させたのではないかと言われています。このことを「衝(しよう)」の技術と呼びますが、その衝の技術を用いたのではないかと思います。この辺りは非常に見事です。黄色に見える線は全て堤防です。ポールを持って歩くと、今でも「カチン、カチン」と堅い物に当たります。石が入っているのです。

### 桑鶴の轡塘

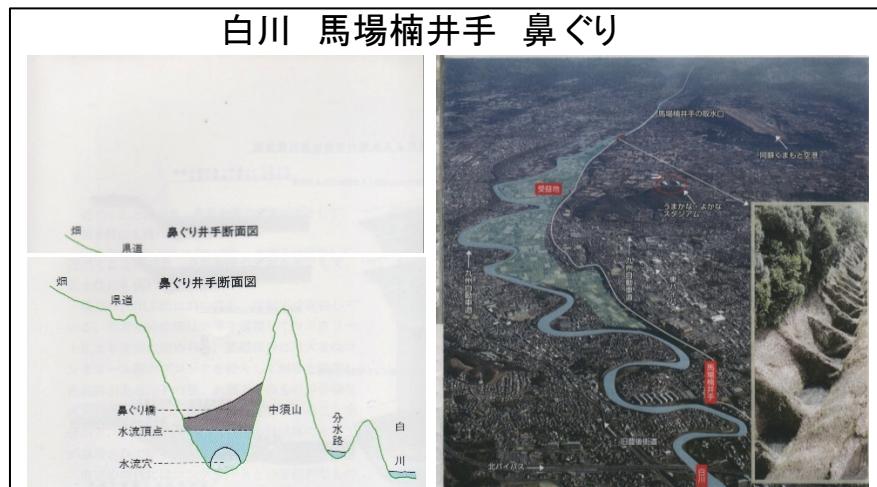
これは桑鶴の轡塘ですが、手前の方はカットしてありますが、結局は「流れを遊ばせる」という工夫です。「下流への影響ができるだけ小さくしよう」と考えて作られたものです。実際の効果はダムほどではなかったと



考えられていますが、「溢れさせる」技術です。佐賀で用いられている技術と基本的には同じようなものだと思います。

### 鼻ぐり井手

これは先ほども出て参りました白川の鼻ぐり井手です。ここが白川で、川近くに一本水路があります。ここは掘りやすかったと思います。ここが鼻縁り井手の水路ですが、わざわざもう一本掘ったのは流量が足りなかったからではないかと思います。必要



量を確保できなかつたために、新たにこちら側に鼻ぐり井手を掘ったと考えられます。ちょっと堅い場所ですからどのようにして掘るかが問題です。右端の図が鼻縁り井手ですが、これには階段が付いていて、多分同時に掘っています。班に分かれて同時に掘った方が早いですね。山の方から降りていって掘ったと考えられます。

この地域が水の受益地です。加藤期と細川期の利水工事の量と受益灌漑面積を比較してみると、全体受益面積 18,000ha のうち、12,600ha 位を加藤期にやっています。工事自体の量は半分ずつくらいですが、灌漑面積としては加藤期にほとんどできあがっていると言うことになります。

### 細かい指示を出す加藤清正

加藤清正は領主ですが、技術屋でもあり、非常に細かいのです。江戸城の普請の時に「自分が言った石の数と違う。ちゃんと送り直せ」と指示を出しています。それでも遅れるのです。

大木さんは佐々成政の家臣でしたから常願寺川の影響を大きく受け

いると感じました。このような有能な部下がいたと言うことも清正の特徴だと言えます。そこが成富兵庫茂安とは違うところかなと思います。成富兵庫は泊まり込んで工事を指揮したけど、清正は毎日通ったというのも違ったところです。

長くなりましたが私の話とさせて戴きます。

### 土木技術者としての加藤清正

- 江戸城石垣普請 慶長11年(1606年)4月13日付加藤清正書状  
『日に届いた石の数が少なく、指示とは違う加工を施しており、驚いている。指示伝達役の五郎左衛門尉は何をやっているのか。別の者を遣わしたので彼らに石の数や形を確認させた上で送れ』

同5月1日付書状

「石垣の角に置く大きい角石はあと5つあれば事足りる。今後は小さくても長さがあるものを送れ。石垣がだんだん積み上がってくると、小さな石の方が都合がよい。ただし、小さくても熊本の時ほどの小ささでは役に立たない」

同5月9日付書状

「角石さえ届けば、他の大名に追いつき、先に完成させることができる。こないだ届いた石のうち、勝兵へ」と名前のある角石がちょうどよい大きさなので、同じ大きさのものを送れ。一日1つの角石を据えたいが、届かないで支障をきたしている。」

引用文献：加藤清正の生涯－古文書が語る実像 熊本日日新聞社編』より

### 河川技術者としての加藤清正

- 徹底した河川の実地調査に見られる実証主義

越前砺波の川潜りの名人曾根孫六、孫七、孫八（加藤家の三孫）に命じ白川の水流や川底の様子を詳しく調べさせた。

『木文書』（木工土佐守兼能）より

一、水の流れを調べるとき、水面だけではなく底を流れる水がどうなっているか、特に水の激しく当たる場所を入念に調べよ。

一、堤を築くとき、川に近い所に築いてはいけない。大河の近くでは、どんなに大きな堤を築いても、堤が切れ川下の人々が迷惑する。

一、川の塘や、新地の岸などに、外だけ大石を積み、中は小石ばかりという工事をすれば、風波の際には必ず破れる。角石に深く心を注ぎ、どんな底部でも手を抜くな。

一、遊水の用意なく川の水を速く流すことばかり考えると、水はあふれて大災害を被る。また川幅を定めるときは、潮の干満、風向きなどをよく調べよ。

一、普請の際には、川守りや年寄りの意見をよく聞け。若い者の意見は、優れた着想のように見えても、よく検討してからでなければ採用してはならぬ。

### コーディネーター 荒牧軍治（さが水ものがたり館館長）

どうも有り難うございました。短い時間で申し訳ありません。引き続き、富田さんのお話を聞きしたいと思います。

### 富田紘次（鍋島報效会徵古館学芸員）

先ほど荒牧先生から紹介して戴いた鍋島報效会で学芸員をしております富田と申します。私たち親子の見分けが付かないとよく言われますが、ひげのある方が紘一でひげの無い方が紘次と見分けを付けて戴ければと思います。先ほど金子先生から「場外乱闘」という、少々物騒な表現も出ましたが、佐賀の富



田と熊本の富田が親子喧嘩しないようにしたいと思います。

荒牧先生の方から、石井樋をはじめ成富兵庫茂安が何をどこに造ったかについてのハード面は分かるけど、それらをどのように運用していったのかというソフト面の話しをして欲しいとお声をかけて戴いて、今日ここに伺いました。

鍋島報效会（徴古館）では、佐賀県・佐賀市・佐賀市教育委員会や、市民団体の方々と一緒に、徴古館に収蔵されております江戸時代に描かれた城下絵図を使った探訪会や展覧会などの取組をここ10年近く行ってきました。人権にかかわる記載のある城下絵図はそれまで公開する機会がなかなかなかったのですが、部落解放研究所の中村先生たちからご指導を戴きまして絵図を公開し、その絵図を使って「この佐賀という町はこんな城下町だったのだ」ということを考えるところから、もう一度地元の歴史を見つめ直していくこうと言う取組を行っています。

こうしたこともあり、今日は私の方からは、石井樋から流れてくる多布施川が城下にとってどんな影響を持っていたのか、具体的に鍋島家に伝わった諸資料を用いて話をさせて戴ければと思います。大きな手掛かりとなる資料が城下絵図ですが、絵図自体には、川筋や水路はたくさん描いてあり、道路も描いてありますから、我々が普通に使っている道路地図の役割と同時に、居住者名も書いてありますので住宅地図の役割も兼ねています。ただ、その水路をどのように使ったかまでは書いてありません。ですから、使われ方を理解するには、文字に残された記録に頼るしかありません。そこで今日のお手元の資料には、できるだけ文字資料をたくさん載せさせて戴きました。

### 城下の川掃除

資料にナンバーを打っていますので、その順番に説明を進めさせて戴きます。まず1についての説明ですが、先ほど佐賀大学の大串先生からもお話しがあったのですが、毎年春に石井樋を堰き止める作業を恒例としてやっています。その理由が資料1に出てきます。それは、城下の水路掃除をすることが第1の目的だったのです。資料を一行目から見ていきますと、

「2月19日から25日までの7日間、数日おいて、29日から3月3日までの約7日間、石井樋留め居り候うち、小路屋敷裏の堀さらへ御座候よう、仰せ達さるべく候」ということで、「石井樋を



**No 1 城下の川掃除**  
〔諸扣帳写〕  
公益財団法人鍋島報效会所蔵(鍋島家文庫)  
〔佐賀城下法令史料集〕公益財団法人鍋島報效会、平成26年

享保3年(1718)  
二月十九日より廿五日迄一限、同廿九日より三月三日迄一限、**石井樋留め居り候内、小路屋敷裏の堀さらへ御座候**よう、仰せ達さるべく候。右に付いては、仕出所関などこれあり、**水流相滞り候所これあり、宜しからざる儀に候。**右躰の儀、小路中御申し談じ、欠さらへ疎い無く相調べられ候ようにと御座候。

一週間、2 クールに分けて堰き止めるから、その間に小路（今でも八幡小路などがあり、武家地のこと）の、屋敷と屋敷の間に流れている水路の川さらいをしなさい」ということなのです。何のために川浚いをするかというのが次の太字のところにあります、「水流が滞っている場所が一部あるようだから、きちんと水が流れるようにしなさい」という理由です。

次の 2 番の資料を見て戴きますと、川浚いをしただけでは余りうまくいかなかったようで、「石井樋よりも下の川筋、すなわち多布施川については、大水のたびに満水になっている。」多布施川はご存じのように城内に入ってきます。城内の入り口が北御門で東御門から出ていますが、この文章で「北御門の内」と出てくるのが城内を意味します。「北御門の内外、ならびに町人地や小路にまで水が溢れて道筋が洗い流されてしまっている。毎年川浚いの手当をしているが、恒例の川浚いだけではなかなか行き届かない」という問題が 1780 年代、江戸の後期くらいになると出てきています。成富兵庫茂安がつくった石井樋をメンテナンスしなさい、毎年春に石井樋を止めて川浚いしなさいと命令したのですが、それだけでは十分ではなく、見てから 150 年以上経って江戸後期になると砂がどんどん溜まってなかなかうまくいかないと言うことが記されています。

結局この時は罪人を使って集中的に川さらいをやると言う処置がとられています。では、川浚いで浚い揚げた砂をどのように活用したのかというのが、次の 3 の資料です。1 行目から見ていきます。「多布施川筋などで毎年春に出た砂は…（ちょっと飛ばして 2 行目太字のところ）各小路の道造りに使いなさい」、道路の造成をしなさいと言っているのです。今

は八幡小路とか中の小路とかくらいしか残っていませんが、江戸時代は 100 近い小路が佐賀城下にはありました。各小路ごとに、道の良いところとそうでもないところがありまして、資料 3 の最後のところに出てくるのが「片田江馬責（うません）馬場小路」ですとか、「北より二番小路」というのはその一本南にある通小路のことですが、その道路の補修に掘り上げた砂を用いなさい」と言う指示が出されています。多布施川筋に土砂が溜まっていると、水が溢れてしまい、その溢れた水で道路が洗い流されてしまう。そして洗い流された砂がまた水路に溜まってしまう、という悪循環です。ですから、集中的な川の掃除が江戸の後期に行われているのです。

**No 2 多布施川の砂問題**

〔泰国际様御年譜地取〕  
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋島家文庫）  
『佐賀県近世史料』第1編第8巻、佐賀県立図書館、平成11年

天明 8 年 (1788)  
**石井樋下河筋の義も、出水の度々に満水致し、北御門内外ならびに町・小路まで水溢れ、道筋洗い崩れ候所も所々出来、かれこれ水害少なからず。尤も毎春川浚い手當て仕る儀には候得共、恒例掘浚いの分にては中々行き届かざる儀につき、…**

**No 3 多布施川の砂の活用**

〔諸扣帳写〕  
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋島家文庫 326-119）  
『佐賀城下法令史料集』公益財団法人鍋島報效会、平成26年

天明 7 年 (1787)  
**多布施川筋所々春出砂、先ごろより段々徒罪の者にて取り除け相成り候。右の砂運び所の儀、諸小路道造り手当て行き届かず候場所これ有り。見分の上、左の通り、小路々々道悪敷くこれ有る由に候条、右場所見計らい砂持ち運び候よう、…**  
一片田江馬責馬場小路 一同北より二番小路 …(下略)…

**No 4 多布施川は暮らしの水**

〔里山方井道屋敷方写〕  
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋島家文庫）  
『佐賀城下法令史料集』公益財団法人鍋島報效会、平成26年

元禄 4 年 (1691)  
**多布施川筋耕作時分、または年により川干落候時、水闇候儀これあり候条、三方門内小路の儀は沙汰に及ばず、小路・町方においても往還そのほか障りに相成らざるよう、漸々自分より井泉を掘り立て候よう申し付つべき事。付けたり、多布施川より城内へ流筋の儀は申すに及ばず、惣て城下水道へ穢たる物は勿論、塵埃等に至る迄、一切入れざるよう申し付くべく候。**

## 多布施川は暮らしの水

では、なぜここまでして多布施川の川筋を確保しようとしたのかと云うと、No. 4 に大前提となるその目的が示してあります。多布施川は何と言っても城下に住む人々にとっての暮らしの水です。それがよく分かるのが No. 4 の資料なのですが、多布施川の川筋ではやはり耕作のシーズンは、多布施川から城下までの農村地帯で水をたくさん使いますから城下に流れてくる水量が限られます。あるいは年によっては川の「干落ち」（春に堰き止める）で多布施川から水が流れてこなくなつて、水が不足する場合があります。それに備えて「普段からこのようなことをしておきなさい」と言うのが太線の棒線の部分です。「自分より井泉を掘り立て候よう申しつくべき事」、つまり各屋敷ごとに自分たちで井戸を掘っておきなさいと言うのです。そして、「多布施川から城内に流れる筋は申すに及ばず、城内の水路に穢れたるものは勿論、塵埃に至るまで一切入れてはいけない」ということですから、多布施川の水がストップしたら城下は暮らしに困るわけです。だから井戸を掘っておきなさいといっています。水が流れてくるだけでは駄目で、ちゃんと水質が確保されていないと使い物にはならないので、塵埃など一切入れてはいけないということになっています。

## 馬洗いの場所指定

しかし、汚れたものはどうしても洗わなければいけない場合もあります。日常生活上そういう場面も出てきます。その時どうするのか。我々も車を洗うとき、自宅で洗ったり、ガソリンスタンドに行きますが、当時は馬を洗う場所がきちんと指定されています。それが No. 5 の資料です。「多布施川筋そのほか、

御城下流川へ馬を牽き入れ、冷し洗い申す間敷く候」、すなわち多布施川では馬洗いは禁止です。どこですかというと、「天祐寺川にて洗い冷ましなさい」と指示をしています。お手元の資料にも載せていますが、石井樋から南に多布施川が流れてきて、佐賀工業高校のところで二股に分かれ、多布施川と天祐寺川として南に流れて行きます。多布施川の水質は基本的に清い流れを確保していたことがわかります。

## 城下南郊への気配り

次に、お手元資料の裏面の方に参りたいと思います。城下町のための多布施川とよく言われますが、確かに江戸時代の佐賀城下の人口は3万人とも4万人とも言われていて、多くの住民がいるのですが、その大都市での生活用水に使うだけではないのです。城下で生活用水を使った後、更に下流のエリアの

**馬洗いの場所指定**

**No. 5**

「諸扣版写」  
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋島家文庫326-118）  
『佐賀城下法令史料集』公益財団法人鍋島報效会、平成26年

享保7年(1722)  
**多布施川筋そのほか御城下流川へ馬を牽き入れ、冷し洗い申す間敷く候。**以前の通り、天祐寺川にて洗い冷し候よう急度筋々相達すべき旨…

**城下南郊への影響**

**No. 6**

「里山方并道屋敷方写」  
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋島家文庫）  
『佐賀城下法令史料集』公益財団法人鍋島報效会、平成26年

天明6年(1786)  
**与賀・川副耕作用水の水流の儀、小路・町・寺社家その屋敷々々より堀浚え相調べ候よう仰せ達し置かれ候処、**間には堀浚え大形これ有り、**水流差し支え候**趣、相聞え候条、**当年干落内堀浚え一円に行き届き候**よう、なおまた追々見分相調べ、万一浚え方これ無き所、時々手当相成る儀候条、筋々懇ろに相達さるべく候。

人々にもそこでの生活があります。つまり有明海に注ぎ込むまでに、川副とか与賀（与賀郷）などの田園地帯があります。その生活もキッチリ考えないといけない。資料 No. 6 に示されているのがそのことで、「城下南の影響も考えなさい」という法令が江戸時代に出されています。与賀郷というのは城下の少し南のエリア、そして川副での「耕作用水のことをしっかりと考えて、城下の堀浚いをきちんと普段からやりなさい」といっておりました。多布施川というは城下のみならず南の田園地帯のことも考えて使われていたということが分かります。

### 藩外にも有名だった川上の鮎

さらには逆側、つまり石井樋よりも北の地域には、川上の興止日女神社がありますが、この川上には写真にありますように大きな鮎築が江戸時代にはありました。ここは藩主しか使ってはいけない鮎築で、殿様がせっかく来て取れなかつたら、殿様がご機嫌斜めになりますから、上流の古湯の人たちが仕掛けを作って鮎を取っていたのを禁止する法令が出されているほどです。こういう鮎築で殿様は遊ばれるんですね。この川上の鮎は藩内で知られていただけでなく藩外にもその名が轟いておりました。江戸時代の後期、松平大和守様（島原の殿様）がそのことを知ります。島原藩も佐賀藩も長崎に出張所（藩邸／長崎聞役）がありますので、その役人同士のやり取りで「大和守様がかねてアユがご好物、川上の鮎は格別、風味も宜しき旨、お聞きに及ばれ」、是非とも川上の鮎が欲しいと仰った。殿様が、他の藩の特産物が欲しいなどとは表だって言いづらいものですから、長崎の出張所の役人同士でプレゼントし合ったという体裁を取つて、結局「鮎一籠（百入）を島原に送られた」と資料に書かれています。鮎は清流にしか棲み

### No 7 藩外にも轟く川上の鮎

No 7

「泰國院様御年譜地取」  
公益財団法人鍋島報效会所蔵（鍋島家文庫）  
『佐賀県近世史料』第1編第6巻、佐賀県立図書館、平成9年

安永4年(1775)

松平大和守様（島原）、長崎聞番より米倉権兵衛まで極内々に申し出しあるは、大和守様御事、かねて鮎御好物の処、川上鮎格別、風味も宜しき旨、御聞き及ばれ候相成る儀候半は、権兵衛自分用にして取り寄せ呉候よう申し語り候。相考え候処、表立ち御所望は成られ難く、御内々にて進ぜられ候よう……

右の末…、鮎一籠（百入）島原へ彼の御用人迄年寄役より書状を以て小道具両人にて差し送らる



川上川の鮎築 公益財団法人鍋島報效会（徴古館）所蔵

10代佐賀藩主  
**鍋島 直正**  
なべしま なおまさ



### No 8 藩主御一家の舟遊び

No 8

「長女貞姫宛て鍋島直正書簡」 安政4年(1857)  
公益財団法人鍋島報效会（徴古館）所蔵

安政4年(1857)

餘り近日は暑気強く、凌ぎかね候につき、一昨日は皆々一同河上より多布施川筋そのほか、漁の舟より参り、狩そのほかいたし大樂み致し申し候。子供など別て大よろこび、賑々敷にて候。あゆ・はや澤山に取り申し候。鱈も大縦に取れ申し候

ませんので、清い川のところで鮎が取れたという記事です。

清い川の様子は川上川から石井樋を通過した多布施川の筋でも同じだったみたいで、No. 8 の資料を見ますと、幕末の殿様 10 代直正公が娘さん宛に直筆で書いた手紙の中で、佐賀における近況報告を江戸に住む娘さんに送っているのです。「余りにも暑くて凌ぎかねるので、家族皆で川上から多布施川筋その他漁の船で行きました。」つまり、納涼に行ったわけです。「狩りその他致し大樂しみいたし候。子供など別て大よろこび、賑々敷にて候。あゆ・はや沢山に取り申し候。鰻も大総に取れ申し候」川上周辺だけでなく多布施川周辺でもあゆ・はやが大量に採れたということを書いています。やはり多布施川でも清流が確保されていたことが窺がわれます。

さらに、多布施川の水をお茶屋井樋から引く神野御茶屋を直正公は造営されていますし、一番下に掲載している図版にあるように多布施反射炉にも水を引き入れ、工業用水としても多布施川の水が使われています。城下の暮らし、南部の農業用水、娯楽の水、工業用水と言ったあらゆる面で多布施川は佐賀の生命線であったことができます。



多布施公儀石火矢鋳立所図 昭和初期 陣内松齡筆  
公益財団法人鍋島報效会(微古館)所蔵

コーディネイター 荒牧軍治（さが水ものがたり館館長）

どうも有り難うございました。まだ種はいくらもありそうで、続けて話を聞きたいのですが時間がありませんので、お許しください。さが水ものがたり館では毎月塾を開いていますので、富田さんにはまた面白い話を仕込んだらその話を聞く機会を設けたいと思います。

どうやら、質問をお受けする時間が無くなってしまいました。毎月第 3 土曜日にさが水ものがたり館でテーマを設けて嘉瀬川交流塾を開いています。その塾にはたくさんの専門家の方が来られますのでその時に質問して戴ければと思います。

今日、富田先生には 3 時間半我々にお付き合いいただきました。感想で構いませんので、最後に一言お願いできたらと思います。

富田紘一（熊本市文化財専門相談員）

今日は熊本からやってまいりました。私は加藤清正の事跡だけのことかと思っていたのですが、成富兵庫茂安さんも数多くの事業をやったと言われる割には、「どこで何人動員したのか、どれくらいの金高が必要であったのか」といった具体的な様子が分かりません。加藤清正の場合でも若干クエスチョンマークの所も結構あります。一番難しいお話を致しますと、地元の方は「加藤清正の事跡だ」と信じているのですね。そこに行って無理に「嘘



だ」と言う必要もないかなとは思いますが、歴史は「なかつたものを有つた」とは言えません。NHK の会長みたいに「右向け」と言われて右を向く訳にもいかない。そこいらは少し苦労している所です。「明らかにこれは違うだろうということも無きにしも非ず」です。ただ「違う」という証拠もないのです。熊本でも佐賀でも分からぬことが結構あります。分からぬことが多いということは謎解きする楽しみが一杯あるということですので、「私は素人だから」と言わず、是非挑戦して戴きたいと思います。「私は素人だ」と言われる方が一番核心を突いた質問をされます。今日は質問が無いということなので、本当にホッとしている所ですが、また、いろいろな機会がありましたら、またお会いしたいなと思っております。今日はどうも有難うございました。

#### コーディネイター　荒牧軍治（さが水ものがたり館館長）

どうも有り難うございました。成富兵庫茂安さんのことを書いた「疎導要書(そどうようしょ)」という本があります。1830 年代に書かれたものですが、その序文に「成富兵庫のことを調べようと思って文書をいろいろ探したがほとんど残っていない。だから聞き取り調査を行いました」と書かれています。ですから、先ほどの富田さんが発表された例のように、いろいろなところに散りばめられている古文書に出てきたときに、歴史学者や考古学者の方が求める事実に基づく考察ができるようになると思います。私たちのように土木工学を担っている人間は、どちらかというと「歴史的な検証が十分でない噂話」でよいと考えている所があります。「成富兵庫と伝わっているものは成富兵庫だ」と思うようにしています。「成富兵庫にしておいたら揉めなくて済む」というのも一つの知恵です。

現在でも水の問題は多くの難題を抱えています。例えば有明海の問題、高潮の問題、そして城原川のダムの問題など、今でも多くの問題、課題を抱えています。我々は、そのような問題と悪戦苦闘する、七転八倒する義務を負っています。その時、この佐賀平野の先人たち、あるいは死者たちが遺した痕跡からその意味を学んで、後世に知恵として残していく必要があります。成富兵庫茂安と加藤清正の時代と我々の違いは「我々は武器を持っていない」ということです。「武」

を持たない我々が使えるものは『合意形成』です。その議論をするとき、「成富兵庫茂安はこのように考えて事業を行った。でも、今はそのままは使えない」ということの積み重ねが必要です。今、九州大学の島谷先生に「あなた方が育てている学生に、この事実を伝えておいてください。彼らが次の世代を担っていくことになるのですから」と言っています。

これからもさが水ものがたり館では「歴史に学びながら今のこと語る作業」を続けていきたいと思っていますので、またご参加いただければと思います。

質問も受け付けない、何とも変なシンポジウムになってしまいましたが、企画を盛りだくさんにしてしまった私の責任であると、お詫びいたします。

先生方、今日は本当にありがとうございました。

**司会進行 竹下泰彦（NPO法人嘉瀬川交流軸理事）**

荒牧先生、有難うございました。参加して戴いた先生方、本当にありがとうございました。改めまして拍手で感謝したいと思います。

それでは、これをもちまして、今日のシンポジウム「成富兵庫茂安と加藤清正」を終わりたいと思います。